

をんな善哉

鈴木聡

【登場人物】

笹本諒子

前田繁男

石原国男

石原光代

石原直美

岡本瞬

塚田浩司

谷川澄江

朝倉陽一

田村直樹

音楽。(たとえば、明るく優雅なワルツ。サテイの『ジュ・テ・ヴ』のような。魅力的なメロディを持ち、繰り返して使えて芝居全体のテーマになるような曲だと嬉しい。)

東京・下町の甘味処「笹本」。その調理場に隣り合わせた座敷の片隅にスポット。仏壇の前に女将の諒子。皿に載せた桜餅を仏壇に備え、チーンと鐘を鳴らして手を合わせる。そして手を降ろし、仏壇に語りかけるように。

諒子

お父さん、お母さん、桜餅よ。きのうは24個売れました。最近じゃ悪い成績じゃないけど、だんだん少なくなるわよ、和菓子を食べてくれる人が。もつと若い人にアピールしなきゃいけないわね。このごろは下町ブームだし、このあたりもたまに若い女の子が散歩してるから、いちご大福やカフェオレ大福なんてのも作ってみようかしら。そういうのどう思う？うちみたいなお店で売ってる店はかえってやらないほうがいいのかな。それからね、あたし今月もちよつと遅れてるのよ。あ、そういうへんなことしたわけじゃないわよ。いわゆるその、だんだん女から遠ざかっていくみたいなの。あ、ごめん、これお母さんに話してるの。お父さんは耳ふさいでて。どう

よ、お母さんもそういう時あったでしょ。あせらなかつた？女が女でなくなる何になるのかな。おばあさん？魔女？砂かけババア？やだ、なんかオバケみたいなものしか思いつかない。でもまだそうと決まったわけじゃないのよ。ちよつと遅れてるだけかもしれないの。というかきつとそうなの。だって、あたはまだ52よ。老け込む歳じゃないわよ。バリバリの現役。恋だってできる。と自分に力いっぱい言い聞かせていることが、歳とった証拠だってこともわかってます。お父さんもういいわよ。仲良く桜餅食べてね。

諒子、もう一度鐘を鳴らし手を合わせる。音楽はOUTし、照明は全体に広がる。春の午後である。座敷にはちゃぶ台があり、傍にジャーと急須と茶筒と湯飲み。厨房で作業をしていた繁男が、桜餅を一つ載せた皿を手に諒子が拝むのを眺める。拝み終えるのを待つて皿を渡しながら。諒子は皿を受け取り自分が飲む茶の支度をしながら。

繁男 親孝行だねいまどき。

諒子 何よ。

繁男 そうやって毎日毎日、手合わせてさ。和菓子屋の女将さんらしくていいや

ね。

諒子 からかわないですよ。生きてるうちはあたしがどれだけ親不孝だったか知ってるくせに。

繁男

ほんとになあ、若い頃のおんたと言やあ、

諒子

バブルだったのよ。楽しいことがいっぱいあつてき、こんな和菓子屋やるなんて夢にも思わなかったわ。大ッ嫌いだったの。古臭くてき。

繁男

旦那は婿とつてあんたに継がせたかったんだぜ。

諒子

知ってたわよ。だから学校出るとすぐうち飛び出してやった。

繁男

で、テレビなんか入っちゃって。

諒子

広告代理店よ。コマーシャルはつくるけど。

繁男

テレビだろ、コマーシャルは。

諒子

テレビだけじゃないのよ。ラジオも雑誌も新聞も。一つ商品担当したらその広告はぜんぶやるの。忙しかったわあ。調査して企画して見積もり出して。仕事が終わるのたいてい夜中の一時か二時よ。でも楽しかった。ちよっぴりだけど、あたしが世の中動かしてるんだぞって感じがしてき。

繁男

へっ、見当もつかねえや。俺が動かすのは小豆の袋だ。

諒子

ハハ。あたしだつていまはお菓子と電卓。

繁男

まあ、よくぞやめて継いでくれたよ。それが一番の親孝行だよ。

諒子

したい時には親はなし・・・ことわざが身にしみるわねえ、年取ると・・・。

繁男

諒子

繁男

諒子

あ、シゲさん、こないだ相談したカフェオレ大福、あれやっぱりやってみない？若い子のお客さん増やしたいのよ。そうしないとうちもこの先ね…。冗談じゃねえよ。大福にカタカナのもん入れてどうすんだよ。カタカナだっっておいしいわよ。シュークリームだっってカタカナでしょ。洋菓子じゃねえんだよ。和菓子の材料つてもんがあんだよ。そこで工夫しねえとよ。

だからその考えを変えないとね。うちもこの先ね…。

店の戸がガラツと開き、

澄江

繁男

諒子

(声) こんにちは。

ああ、いらっしやい。(諒子に) 澄江さんだよ。

え？澄江？

澄江、店内から事務室越しに姿を現し、

澄江

諒子

澄子

おす。

おす。

ちよつと顔見にね、仕事で近くまできたから。ここんとこ電話ばかりで

顔見てなかったし。

諒子 あがつてよ。お茶飲んでって。

澄江 うん、お邪魔します。

諒子 シゲさん、桜餅。2つ。

繁 あいよ。

諒子と澄江は喋りながらちやぶ台へ。諒子は茶の支度をしながら。

澄江 いいの？売り物でしょ。

諒子 いいわよ、どうせ余るんだから。

澄江 余らせちゃだめじゃない。あんた経営者なんだからちやんと生産計画立てないと。

諒子 やってるわよちゃんと。だけどどうしたって一個か二個はね。

澄江 余ったらどうすんの？

諒子 あたしが食べんの。

澄江 毎日？

諒子 そうよ。

澄江 女将さんになってからずっと？もう十年以上よ。

諒子 十一年。

澄江 だから太ったのかあんだ。

諒子 ストレスもあんのよ。頑固職人と毎日顔突合せてさ。

澄江 ああ、ふふ。

諒子 売り上げだつてジリ貧だしね。

澄江 そう。

諒子 だいたいシゲさんだつてあと何年働けるかわかんないでしょう？ そうな

つたらこの店やってけないわけよ。どうすんのかしらねえ、あたし。

そりゃストレスたまるわね、しょうがないわね、こうなつちやつても。

ちよつと人のことばかり言わないでよ。あんだだつて太ったじゃない。

あたしはお酒よ。

澄江 昔はスラーつとしてたわよねえ。バブルの頃はボディコン着ちやつてさ。

諒子 もうやめようこの話。お互い傷つけ合うから。

澄江 あんたがけしかけたんでしょ。

諒子 悪かったわよ。ついからかいたくなんのよ、あんたの顔見ると。

澄江 ふふふ。

繁男、厨房から桜餅の載った皿を差し出し、

繁男 はい桜餅。

諒子

ありがとう。

澄江

すいません。

諒子

さあ、あんたもアンコで太りなさい。

澄江

いただきます。わあ、おいしそう。今年初めてよ。(桜餅の葉っぱを慎重に取ろうとする。)

諒子

で、どうよ仕事は。

澄江

うん、頑張ってる。

諒子

すごいわよね、女だてらに執行役員なんて。会社始まって以来でしょう。

澄子

そのぶんプレッシャーもすごいけどね。女が何やるんだって注目されてるし。

諒子

ああ、変わっちゃったなあ。

澄江

何が？

諒子

お互いの人生よ。昔は同期で一緒に仕事してたのに。

澄江

だからこうやって付き合い続いているんじゃない。これであんたがまだ会社においてライバルだったら口もきかないわよ。それにお互い、ここまでずー

っと独身できちゃったしね。

諒子

きちゃったねー。

澄江

きちゃったわよ。．．あ、あんた相談は？

諒子

え？

澄江　こないだ電話で言ってたでしょ。こんど会ったら相談したいことがあるって。

諒子　ああ、いいわよ今は。あの時は夜だったしお酒飲んでしたし。

澄江　夜お酒飲まないと言えないこと？よけい聞きたくなるじゃない。言いなさいよ。

諒子　・・・桜餅ってさ。

澄江　え？

諒子　色っぽいと思わない？

澄江　なんでよ。

諒子　（自分の桜餅を取り）真っ白な餅肌に、葉っぱの着物がはりついて、それをそろりそろとはがして行って・・・。

澄江　やめなさいよ。欲求不満の中年女みたいよ。

諒子　（桜餅を置く）

澄江　欲求不満なの？

諒子　実はね、

澄江　うん。

諒子　その商店街にバーがあるのよ。「ドルフィン」ってお店なんだけど。

澄江　ああ、知ってる。サーフボードの看板が出てるところでしょう。

諒子　そう、マスターがサーファーなのよ。日焼けして、細身なんだけど筋肉質

で、

澄江 ああ、あんた好きそう。歳いくつよ。

諒子 34。

澄江 一回りも年下じゃない。

諒子 一回り半よ。あたしにサバ読んでどうすんのよ。

澄江 で、何？どうかなっちゃったのその彼と。

諒子 なってないわよまだ。あたしが勝手にムラムラしてるだけなんだから。

澄江 ムラムラしてんだ。

諒子 そうなのよ。恋愛感情っていうよりムラムラなの。そこ相談したかったの

よ。いい歳しておかしいんじゃないかと思って。あんたどうよ。ムラムラする？

澄江 ていうか、付き合ってる人いるし。

諒子 え、いるの？なんで教えてくれなかったのよ。

澄江 最近なのよ。そのうち紹介しようと思ってただけどね。

諒子 ショック。違う世界の人になった。

澄江 いじけないでよ。

諒子 その一方でき、

澄江 うん。

諒子 そろそろ女も終わりなんじゃないかと思うのよ。だからね、このムラムラ

は、ローソクの火が消える直前の、最後の、ムラムラなんじゃないかと思
って、

澄江 ちよつと悲しいこと言わないでよ。あたしたちまだまだよ。

諒子 そうかな。

澄江 そうよ。アタックすればいいじゃない、そのドルフィンに。

諒子 無責任なこと言わないでよ、他人事だと思つて。断られたら傷つくしき、

あとできまり悪いじゃない、商店街のつきあいあるんだし。

澄江 何言つてんの。昔は恋多き女だったじゃない。あたし数えられるわよ。片

手じゃ足りない。

諒子 そりゃ昔はね。

澄江 行くわ、そろそろ。

諒子 え、行っちゃうの？

澄江 そうよ。お得意いく途中だもの。ちよつと顔見につて言つたでしょ。

諒子 ちよつとすぎるわよ。中途半端に人に言わせといて。

澄江 ハハ、こんどゆつくりね。シゲさんご馳走様でした。

繁男 どうも。

澄江、事務室から店に降り靴を履く。諒子は見送る流れで。

澄江 女は死ぬまで女だって言うわよ。

諒子 そうかな。

澄江 最後の炎だとしたらよけい逃しちや駄目。やらない後悔よりやった後悔よ。

諒子 ハツパかけないでよ。

澄江 ハツパかけるわよ、桜餅だけに。

諒子 ハハハ。

澄江 じゃあね諒子、また。

諒子 また。

澄江、店の戸から退場。

諒子 ……

繁男 相変わらず元気だ。こないだ来た時より若返ったよ。

諒子 そうねえ……

諒子、ちゃぶ台へ。皿に残った桜餅の葉っぱをつまみあげる。

諒子 ……

と、舞台上手、裏路地のほうから隣の「石原酒店」の経営者夫婦・国男と光代が現れる。

国男 ほんとうがねえなあ。

光代 ほんとだよ。

国男 何考えてやがんだまったく。

光代 まったくねえ。

二人、庭に面した廊下越しに、

国男 女将さん、

光代 女将さん、

諒子 え、あ、酒屋さん。

国男 聞きました？地上げの話。

諒子 地上げ？聞いてないけど。

国男 ほら聞いてねえよやっぱり。言いにきてよかったよ。

光代 よかったねえ。

諒子 このへんなの？

国男 このへん丸ごと入っちゃうらしいぜ。再開発プレゼントだってよ。

光代 プロジェクトだよ。

国男 なんだよプロジェクトって。

光代 知らないよ、ビル建てたりすることだろ。

諒子 で、もう進んでるの？ 地上げ。

国男 いや、まだ本式じゃねえらしいんだよ。いまんとはね、もしこういうこ

とがあつたらおたくはどうします？ って、何軒かに聞きにきたって話なんだけどさ。

光代 目つけられたんだよ、交通がいいわりに土地が安いからさ。

国男 そうだなあ。

光代 それに古い店が多いだろ。跡取りがいなくて商売やめちゃおうかってうちもあるからね。

国男 俺はそれ聞いて頭来ちゃったんだよ。ゆうべ銭湯でメガネ屋のオヤジに会ったんだけどさ、

諒子 うん。

国男 あそこも息子は継がねえでサラリーマンになっちゃったし、最近安いメガネ屋が方々にできて売り上げガタ落ちなんだってさ。

諒子 そう。

国男 で、地上げの噂したらさ、うちに話が来たら売っちゃおうかなって。

光代 弱気になってんだよ。

国男

だから叱ってやったんだよ。弱気になってどうする。俺たちの手で商店街を守ろう。だいたいあんたはメガネかけて風呂に入るほどメガネを愛してるじゃないか。あんたの人生からメガネを取ったら何が残るんだ。

諒子

そしたら。

国男

黙っちゃったよ。メガネ曇って見えなかったけど、ありや泣いてたな。

光代

辛いとこだよ。将来のこと考えたらさ。

諒子

酒屋さんのところは？

国男

うちは売らねえよ。ずーっと酒屋つづけんだよ。

諒子

でも男の子いないじゃない。

国男

娘の直美に婿取らすんだよ。

諒子

直美ちゃんに？

光代

インターネットさんかい。

国男

冗談じゃねえよ。インターネットさんに酒屋ができるかよ。

諒子

何インターネットさんって。

光代

最近、直美に彼氏ができたらしいのよ。インターネットで知り合ったんだ

って。

諒子

ああ。

国男

フィギュアやってるっていうからスケートの選手かと思ったんだよ。そしてたらオタクだったさ。

諒子 オタク。

光代 ロボットみたいだね、ちっちゃいお人形作ってんだって、いい歳してさ。

国男 リュックしょって秋葉原にいるような野郎だよ。

諒子 会ったの？

光代 会わないわよ。直美はうちに連れてきて紹介するって言ってんだけどね、

この人が断固拒否してんの。

国男 会わねえぞ絶対。お前が会って別れさせろよ。

光代 やだよ。

と、厨房から繁男が、二つの小さな腕を載せた盆を手に、

繁男 女将。

諒子 え、

繁男 ほら、こないだのお礼。

諒子 ああ。酒屋さん、善哉。よかったらこちらで。

国男 え、いいのかい。

諒子 お酒いただいたじゃないですか。一ノ蔵の二合瓶。

繁男 俺も飲んだ。

諒子 おいしかったわあ。

国男 いやあれはどうせね、正月用の売れ残りだったんで、

光代 いいのにねえ、こんなことしてもらわなくても、

国男 と言いながら今にも食いそうじゃねえか。ハハ、じゃあ遠慮なく。

諒子 どうぞ。

光代 ねえあんた。

国男 なんだよ。

光代 夫婦善哉だねえ。

国男 馬鹿言うなよ。

四人、笑う、国男と光代はちやぶ台で善哉を夢中で食う。

と、店の戸が開き、国男と光代の娘・直美が現れる。(以下しばらく

く直美は両親がそこにいることに気づかず喋り続けるわけである)。

直美 こんにちは。

諒子 あ、いらつしやい。いまちようどね、

直美 女将さんいます？

諒子 はい。(事務エリアから店内の直美を見て) ああ、いまちようどね、

直美 相談があるの。

諒子 え、

直美　うちのオヤジ最悪なのよ。あたしにやっと彼氏ができたのに会おうともし

ないのよ。

諒子　あ、いまね、

直美　理由なんだと思う？オタクだからって言うの。最悪でしょう。凄い偏見なのよ。そりゃフィギュア作ってるしオタクっぽいところはあるけど、すごいちゃんとした人なのよ。頭いいし友達の前で彼氏なんかより全然人生のこととか考えてるしね。

諒子　うん、ちよつと落ち着こう。

直美　落ち着いてる場合じゃないのよ。今日は戦闘モードなの。無理やり会わそうと思つて彼氏そこに連れてきてるわけ。で、これからうちに連れていくんだけど、その前に諒子さんに作戦相談しようと思つて。お土産に最中ぐらい持ってたほうがいいんじゃないかって彼氏が言うし。

国男　最中なんていらねえよ！

直美　え・。

国男、直美の視界に入る位置まで動き、

国男　悪かったな、最悪なオヤジで。

直美　あ・・。

光代も顔を出す。

直美

諒子さんなんで言わないのよ。

諒子

言おうとしたでしょ、さんざん。

国男

言っとくがなあ、俺は会わんぞ。

直美

いるのよそこに。

国男

勝手に来たんだろう、会う必要ない。

光代

でもあんた、ちよつとぐらいはさ、

国男

なんだよお前まで。

光代

会うだけ会ってさ、いやだったら追いついていいじゃないの。

国男

無駄だよ、どうせ追いつくんだ。

直美

諒子さん・・・。

諒子

じゃあ酒屋さん、あたしも言わせてもらいますけどね、

国男

なんですか。

諒子

いくらなんでも頑固すぎるわよ。いい娘さんじゃないの、彼氏を親に紹介しようってんだから。こそこそ付き合いたくないってことなの。親のことをだいに思ってるから。直美ちゃん、いいからここ連れてきちゃいなさい。

直美 はい。(戸から店外へ)

国男 おい!

光代 いいの?修羅場になっちゃうかもよ。

諒子 いいわよもう、成り行きよ。

国男 冗談じゃないよ、俺帰るぞ。(庭から行こうとする)

諒子 だめ、善哉食べたでしょ!

国男 え?

諒子 善哉食べたんだからいなさい。

光代 そうだよ、善哉食べちゃったからねえ。

国男 関係ねえだろ善哉は。

と、店の戸が開き、直美と、その恋人・岡本瞬が現れる。

諒子 ほら来たわよ。座って座って。

光代 座りなよ。

国男 なんだよ二人して。

国男、光代と並んでちやぶ台上手に座ることになる。

諒子は事務室から直美と瞬を迎える。

諒子 いらっしやい、女将の諒子です。

瞬 岡本です。おじゃまします。

諒子 シゲさん葛餅。

繁男 あいよ。

繁男、シヨーケースから最中の折り詰めを出し、諒子に。諒子はそれを瞬に渡し、

諒子 さ、これ持って。

瞬 はい。

直美 行こう。

瞬 うん。

直美に続いて瞬、事務室から座敷へ。

直美 連れてきました。

瞬 はじめまして。岡本瞬です。直美さんとお付き合いさせていただいてます。

国男、ジロツと睨む。瞬、思わす後ずさり。

諒子

さ、怖がらないで座って。

瞬

はい。。。

瞬と直美、ちゃぶ台をはさんで国男夫婦の前に座る。

諒子、事務室寄りの座敷の隅に座る。繁男は厨房で成り行きを見守る恰好。

瞬

あの、これ、お近づきのしるしに。

瞬、最中の折り詰めをちゃぶ台に載せ、国男の前に押し出す。

国雄

。。。

国雄、折り詰めをつかんで庭に投げようとするど、

諒子

うちの最中です！

国雄、はっと気づいて、折り詰めをちやぶ台に戻す。

光代 どうもごていねいに。いただきます。

光代、折り詰めを取り、国男から手が届かない自分の脇へ。

直美 あの、改めて言うかね、あたしが読んてるB級グルメのブログの人がア

ニメファンで瞬君のブログにリンクが張ってあったの。で、読んだら面白

しろかったからリコメンしたの。で、ツイッターもやってるのわかっ

たからツイートするようになって、

何言ってるかさっぱりわかんねえよ。

要はインターネットだろ。

まあそういうことだけだ。

で、君は働いてるのか。

はい。ゲームのバグとか、

え？

いえ、コンピューターソフトの会社です。

国雄

瞬

国雄

瞬

国雄

直美

光代

国雄

直美

光代

瞬 月収、二十万ぐらいです。

国雄 歳は。

瞬 二十九です。

国雄 二十九で二十万でどうなんだ。

瞬 どうでしょう。

国雄 将来は人形で儲けんのか。

瞬 いえ、フィギュアは趣味です。

国雄 じゃ夢はなんだ。

瞬 ・・なるべく病氣しないように、

国雄 男なら夢を持って。

瞬 はい。

国雄 俺は若い頃なあ、船乗りになりたかったんだ。シンドバッドに憧れてな。

瞬 シンドバッドは好きです。

国雄 酒屋になったのはうちが酒屋だったからだ。酒屋じゃなかったら船乗りになっ
ていた。

瞬 はい。

国雄 ・・じゃあ。(立ち上がり縁側へ)

光代 ちょっと、もう終わりがい。

国雄 もういいだろ、会ったんだから。

直美 なんにも話してないじゃない。
国雄 話したよ、シンドバッドの話とか。店忙しいんだよ。

国雄、上手裏路地のほうへ退場。

光代 ちよつと！なんだろうねあの人は。悪かったね諒子さん。

諒子 いえ。

光代 あんたもねえ、またゆっくりね。

瞬 はい。

光代も上手路地のほうへ退場。

直美 なんかごめんね、頑固オヤジで。

瞬 いや、会えてよかったよ。シンドバッドが好きですって言ったら、ちよつと心通じた気がしたし。

直美 あれ通じたのかな。

瞬 通じたよ。少なくとも会う前よりは。だから会えてよかったよ。

諒子 でも知らなかったわねえ、船乗りになりたかったなんて。

直美 あたしも。

瞬 ああいう話されると困るんですね。なりたいものなんてないから。
瞬 諒子 なんにも？

瞬 ええ、普通に暮らせれば。

瞬 諒子 クルマ欲しいとか、マンション欲しいとか。

瞬 諒子 そういうのもないですね。幸福は脳内にあると思うんで。

瞬 諒子 脳内？

瞬 諒子 脳みその中です。たとえばピカソの一億円の絵があっても、絵心の無い人には、ただの落書きに見えるかもしれない。

瞬 諒子 そうね。

瞬 諒子 でも絵心のある人が見たらすぐ感動して一億円でも安いと思うでしょう。

瞬 諒子 うん。

瞬 諒子 つまり、幸せは絵が決めるわけじゃなくて、絵を見て感じる脳が決めるんです。だから幸福は脳内にある。

瞬 諒子 なるほど。

瞬 諒子 そう思うとお金持ちになる必要なんてないですよ。フィギュアが上手に作れたら、僕はスカイツリーを作った人と同じぐらいの喜びを感じられるかもしれない。そうやって、本を読む時も、散歩する時も、料理を作る時も、できるだけいっぱい幸福を感じた人が正しい意味での人生の勝ち組だ

と思うんです。

諒子
ほんとそうだわねえ。

直美
瞬のこういう考え方が好きなの。何があっても楽しく暮らせそうでしょ。

諒子
うん、わかる。

瞬
じゃあそろそろ。

直美
そうね。

以下、事務室から店へ移動する二人を諒子が見送る流れで。

諒子
よかったらまた遊びにきてね。

瞬
はい。

直美
なんかすいませんお世話になっちゃって。

諒子
いえいえ。ともかく前進してよかったわ。

瞬
あ、葛餅のお金。

諒子
いいわよ。お近づきのしるしに。

瞬
すいません。

直美
シゲさんお邪魔しました。

繁男
いえ。

直美
じゃあさよなら。

諒子

さよなら。

直美と瞬、店の戸から去る。音楽。

諒子

。。。

諒子、茶の間へ戻り、ちやぶ台を拭いたり、

諒子

(NA) 幸福を、できるだけいっぱい感じた人の勝ち。そうね、ほんとそ
うだね。お母さん、あたしもっと、感じたい。。。

その思いを反芻するようにちやぶ台を拭き続ける諒子。暗転。

【二場】

雨の音。明かり入ると梅雨時・午後である。ちやぶ台には歳時記や和菓子の写真が載った本などが、ページを開いたまま置かれている。と、上手・裏路地のほうから、それぞれ鞆で雨をよけながら澄江と朝倉が駆けてくる。

澄江

きやー、走れー。

澄江と朝倉、縁側まで来て一安心。(ここはひさしがあるのだ)。二人、ハンカチで服や鞆を拭きながら、

朝倉

うかつだったね、傘持ってこないのよ。

澄江

そうよ、どうして持ってこなかったの、梅雨時よ。

朝倉

出てくる時はピーカンだったからさ。君は？

澄江

あなたが持つてくると思ったからよ。

朝倉

僕もそうだ。もし降ってきても君が持つてると思った。

澄江

お互い甘えが出てるんじゃない？依存心が強くなってるのよ。

朝倉

そうかな。

澄江 気をつけましょう。お互い自立した大人なんだから。恋愛はたいてい相手に甘えすぎること破綻するのよ。いままでさんざん経験してきた。

朝倉 じゃあこれからは晴れてても折り畳み傘を持っておくことにするよ。

澄江 そうして。あたしもそうする。

朝倉 でも、貸してくれるかな傘。

澄江 だいじよぶよ。こういう店には忘れ物のビニール傘が2、3本必ずあるのよ。(店に向かって) 諒子ー・・トイレかな。

朝倉 僕のはなんて紹介するの？

澄江 もちろん付き合ってる人だって言うわよ。そういう人がいるってことは言うてあるし。

朝倉 友情にひびが入らない？女の人は微妙だからな。

澄江 それほどやわじゃないわよ、あたしたち。

と、厨房の戸口が開き、材料(砂糖・小豆)の袋を担いだ繁男が登場。

袋を棚のあたりに運ぶ。

澄江 シゲさん、

繁男 あ、どうもいらっしやい。裏からですか？

澄江 うん、急に降ってきたからね、近道。傘借りようと思って。

繁男 傘ですか。忘れ物が2、3本ありますよ。ビニールですけど。（と言いな
がら店へ向かう）。

澄江 あ、充分よ。すみません。（朝倉に）ほら。（繁男に）諒子どこ行ったの
か。

繁男 （店の傘立てから傘を取りながら）さっきまでいたんですけどね。

澄江 本が開いてあるのよ。和菓子の本みたい。

繁男 （二本の傘を手に事務室から縁側に向かいながら）ああ、じゃあ夏の菓
子を考えてたんでしょう。どうぞ、ここ置いておきます。（二本の傘を縁側
に立てかける）。

澄江 ありがとうございます。

朝倉 すみません。

澄江 こちら、お友達の朝倉さん。名職人のシゲさん。

朝倉 はじめまして。

澄江 どうも。

朝倉 歳時記も使うんですか、菓子を考える時。

繁男 季節のもんですからねえ。竹、すだれ、金魚、花火・・そんなもんを昔つ
からの材料でこしらえんのが菓子の面白みですよ。
なるほど。文化ですねえ。

朝倉

と、階段から諒子が降りてくる。海の写真がたくさん出ている沖縄の大判ガイドブック（80年代の出版物）を持っている。

澄江
諒子、

あら、

澄江
近くにいたんだけどね、急に降られたから傘借りにきたの。

繁男
あ、これ。

あら、どうぞどうぞ、どうぞ。

繁男
（無言で去る）

朝倉
どうも。

繁男、事務室から店を通り厨房へ戻る流れで。

澄江
あの、こちらね、朝倉さん。ほら、前言ったと思うけど。

諒子
ああ、ああああ、どうも、お噂はかねがね。

朝倉
朝倉です。なんかすみません、初対面が傘借りにきたなんて。

諒子
ハハ、ほんと。でもかえっていいですよ。レストランなんかで紹介されるよりは気楽で。ねえ。

澄江　　そうでしょう。あたしもさ、いつか紹介しなきゃと思ってたんだけど、わざわざ連れてくるのも変かなあって思ってたさ、

諒子　　親兄弟じゃないんだもんねえ。

澄江　　だからちようどいいと思ったの。傘借りるのにかこつけて。

諒子　　ハハ。

澄江　　じゃああらためて。笹本諒子さん、あたしの無二の親友です。

諒子　　あらためまして、諒子です。

澄江　　で、朝倉陽一さん。あたしのボーイフレンドです。

朝倉　　今後ともよろしく願います。

澄江　　固い。仕事じゃないんだから。

朝倉　　ハハ、そうか。

諒子　　お仕事は何されてるんですか。

澄江　　ソーラーよ。

諒子　　ソーラー？

朝倉　　太陽光発電ですよ。そのパネルを。

諒子　　ああ、屋根についてるおうちありますよねえ。

朝倉　　ええ、それです。でもね最近企業も採用してくれるんですよ、工場や自社ビルに。

諒子　　ああ、エコブームですもんね。

澄江 そう、エコよエコ。いちおう社長さんなのよ。

諒子 いいじゃないですか将来性あって。

朝倉 へへへ。

諒子 どこで知り合ったの？

澄江 パーティー。去年、うちの会社、五十周年だったのよ。

諒子 あらそうだったけ。

朝倉 たまたま僕も呼ばれてたんですよ。で、共通の知り合いにご紹介いただいた。

諒子 へえ、すぐピンと来たの。

澄江 すぐじゃないわよ。そのあと、一緒に喋ってた人たちとカラオケ行く流れになっちゃってさ。

諒子 カラオケ。好きなんですか。

朝倉 ええ、まあ、多少は。

澄江 多少じゃないでしょ、たいそうでしょ。歌い続けたのよ、なぜか二人でデュエットばかり。

諒子 銀恋とか。

澄江 そう。あと、(歌詞の一部を歌い)とか。

朝倉 「男と女のラブゲーム」。

澄江 そう、あと「居酒屋」でしょ、「三年目の浮気」でしょ、あと・・

朝倉 「カナダからの手紙」。

澄江 それ！

諒子 ほとんどじゃない。

澄江 そうなのよ。で、みんなに冷やかされてねえ、

朝倉 なんだか僕が送っていくことになっちゃって。

澄江 あ、言っとくけどバツイチよ。

朝倉 慰謝料は払い終わりました。

澄江 それ聞いてグツと浮上したのよ候補者として。

朝倉 縁なのかなあ。あそこでデュエットしなかったら。

澄江 ほんとねえ、縁があつたのよねえ・・・。

諒子、感慨にふける二人を微笑み、うなずきながら眺めている。

澄江 あ、喋りすぎた。

諒子 いいのよ、いくらでも喋って。

朝倉 すいません、傘借りにきて何やってんだ僕たち。

澄江 あら、これ懐かしい、昔いっしょに沖繩行つたとき買ったやつじゃない？

諒子 そう。

澄江 へえ、行くの？

諒子 違うわよ、お菓子作りの参考にしようと思つてね。歳時記眺めてたんじゃ

月並みなものしか思いつかないし。

澄江 このへんの発想が諒子すごいよ。会社にいた頃は優秀だったんだから。

諒子 やめてよ、ふふ。

朝倉 いろいろおありなんでしょう、武勇伝も。

諒子 ないですよそんな。

澄江 あるじゃない、ほら、テカランデーション。

諒子 ああ、ハハ。

朝倉 え、何それ。

澄江 まだ二、三年目の頃にね、一緒に化粧品会社を担当してたことがあるのよ。

商品はファンデーションだったんだけど。

諒子 朝つけて夕方になってもテカらないのが売り物だったんです。ほかのは肌

のあぶらがしみ出てきちゃって。

朝倉 ああ、それでテカランデーション。

澄江 そう、諒子のアイデアなのよ。CMの人たち、ムツとしてたわね、営業の

女の子の思いつきが採用されちゃったもんだから。

諒子 気まずかったわね、ちよつと。

澄江 でもそれで宣伝部長に気に入られて、発表会の司会までやったのよね。上

手なのよ、人前で喋るのも。だから販売員の研修にも駆り出されて。

諒子　なんでもやったわね、あの頃は。広告会社の営業なんて要はなんでも屋ですから。

澄江　企画はできる。プレゼンがうまい。お得意に信頼される。同期の女子じゃ、あんた、一、二を争ってた。

諒子　もう一人はあんた？

澄江　そう。

諒子・澄江　（笑う）

朝倉　辞めるときは悩まなかったんですか。

諒子　そりや悩みましたよ。上司にも止められましたしね。でもこう考えたの。会社はあたし一人いなくなってもずーっとあるけど、この店はあたしがいなくなったらなくなっちゃうって。

澄江　（こっそり）シゲさんのこともあったんでしょ？失業しちゃうもんね。

諒子　まあ、人生いろいろでございますわよ。カラオケがご縁になったり。

澄江　やめてよ、ふふ。

諒子　あ、ごめんなさい、いまお茶出すわよ。

澄江　あ、今日はおかまいなく。

朝倉　仕事の約束がありますんで。

諒子　そうですか、ほんとお構いもしませんで。

朝倉　いえ、これで充分ですよ。（傘を取り一本を澄江に渡す）

澄江

じゃあまた。

諒子

こんどはゆっくりね。レストランでもいいわよ。

澄江

あらご馳走してくれるの？

諒子

凶々しいわね、こっちがご馳走様になります。

二人

ハハハ。

朝倉

お借りします。

諒子

お気をつけて。

澄江、軽く手を振り、朝倉と共に上手裏路地へ退場。厨房から、作

業着を脱ぎハンガーに掛けた繁男が声をかける。

諒子

。。。

繁男

女将・女将、

諒子

はい。

繁男

ちよつと銀行いってきます。

諒子

ああ、どうぞ。ついでにコーヒーでも飲んでゆっくりしてきてよ。こんな

日はお客さんも少ないだろうし。

繁男

じゃ。

諒子

いってらっしゃい。

繁男、厨房の戸から退場。

諒子

。。。

諒子、ちやぶ台で沖縄のガイドブックを眺め始める。

と、店の戸が開き、塚田が現れる。手に回覧板を持っている。

塚田

こんにちは。

諒子

はい、いらっしやいませ。

諒子、事務室から店内を見て、

諒子

あ、ドルフィン。

塚田

回覧板持ってきました。

諒子

あらそう、ありがとうございます。

塚田

(回覧板を渡しながら) いまドルフィンって呼びました？

諒子

(回覧板を見るふりをしながら) え、そうだっけ？

塚田

そりゃドルフィンは店の名前だけど、俺、塚田って言うんですよ。

諒子 知ってるわよ、でもドルフィンのほうが言いやすいから。

塚田 そうかな。じゃあ頭の中で俺のことドルフィンドルフィンと呼んでるんですか。

諒子 そうよ、ドルフィンドルフィン。

塚田 ハハ、変なの。

諒子 あら、商店街のイベントのことが載ってるわね。内容未定、只今企画中。知ってます？俺と笹本さん委員ですよ。

塚田 そうだったわね、いま企画しようか。あがってく？

諒子 なんかアイデアあります？

塚田 ううん、まだ。

諒子 俺もないですよ。お互い考えてからのほうがよくないですか。

塚田 そうね、でもとりあえず打ち合わせの日だけでも決めない？ちよつとあがって。

諒子 そうすか、じゃあ。

塚田 どうぞどうぞ。

諒子 お邪魔します。

諒子、塚田、事務室から座敷へ。

諒子 ごめんなさいね、散らかしてて。いまお茶入れるわ。

塚田 いいつすよ。どうせ夜、店で飲むんで昼は飲まないようにしてるんす。

諒子 そう・・・

塚田 あ、沖繩の本じゃないすか。(手に取る)

諒子 沖繩好き?

塚田 そりやそうすよ、サーファーですから。

諒子 あ、そうよね、偶然ね、なんでここにあっただら。

塚田 沖繩、行っただんすか。

諒子 うん、昔ね 25年ぐらい前かな。18ぐらいの時。

塚田 そうとうサバ読んでないすか。

諒子 ぐらいって言ったでしょう。前後十年ぐらいの幅があんのよ。

塚田 ありすぎつすよ。水着、着たんすかその時。

諒子 そりやそうよ、ビキニ。

塚田 ビキニ着たの?

諒子 ボディコンの時代だったのよ。コンシヤスしてたのよあたしも。

塚田 写真ないんすか。

諒子 見たい?

塚田 いや・・・いいす。

諒子 ・・ねえ、今年に行くの? 沖繩。

塚田 行きたいすねえ。三日ぐらい店休んで行っちゃおうかな。

諒子 いいねえ、三日ぐらい。あ、こういうサンゴ礁ほんところにあるのかな。(と

言いいながら、さりげなく塚田ににじり寄ってゆく)。

塚田 ありますよ。

諒子 あ、きれいだねこれ。

塚田 行きたいすねえ。

諒子 行きたいよねえ。

塚田 行っちゃおうかな。

諒子 行っちゃおうよ。うちも三日ぐらいなら休めるかな。

塚田 え、笹本さんも行くの？

諒子 行くのよ、二人で。

塚田 ・・シゲさんと？

諒子 ちがうわよ。やだなあ・・。

塚田 ・・。

諒子 前からさ、塚田君をね・・(と言いながら塚田の腕に指を這わせる)

塚田 ・・からかっています？

諒子 ううん。(目を見つめながらゆっくり這わせてゆく)

塚田 ・・俺がその気になったら大笑いしますよね。

諒子 ううん、ほんと・・(指を這わせる)

塚田 どつきりカメラ的な・・・。

諒子 ううん・・・(指を這わせる)

塚田 ・・冗談やめてくださいよ。(と、諒子の手を振り払い)もうマジかと思
っちゃいましたよ俺。

諒子 ・・そうよ、冗談よ、冗談に決まってるじゃない。ハハ。
塚田 でしょう。よかったー、ハハ。

諒子 あ、あれよ、イベントの企画、どつきり商店街。ハハ。

塚田 なんだ、だけど趣味悪いつすよ、却下。

諒子 却下か、じゃ考え直そうかな。

塚田 そうすよ、また考えましようよ、来週ぐらいやりましようか。(立つ)

諒子 そうね、来週。(立つ)

塚田 じゃあスケジュール見えたら連絡します。(事務所のほうへ)

諒子 お願いします。

塚田 じゃあまた。(店に降りる)

諒子 ありがとうね。

塚田 雨すごいつすね。

諒子 ほんと。梅雨はやあね。

塚田 じゃ失礼しまーす。

諒子 ご苦労さまでしたー。

諒子

・
・
。

塚田、店を出てゆく。事務室から見送った諒子、力が抜けたように壁に寄りかかる。

諒子、泣く。音楽。暗転。

【三場】

音楽F Oと共に蝉の音が聞える。明かり入ると、夏の初め（7月上旬）の午後。縁側に腰掛けている直美と瞬。二人で酒屋のパンフレットを見ながら、

瞬 酒屋の楽しみってなんなんだろう。

直美 お父さんは銭湯好きよ。一番の楽しみだつて。

瞬 そういうことじゃなくて仕事でさ。

直美 じゃあ配達かな。ビール届けに行つてお喋りするの好きみたい。

瞬 でも配達減つてるでしょう？みんなコンビニで買っちゃうし。

直美 そうなのよ。だからあたしコンビニにしちやえばつて言うの。

瞬 そしたら？

直美 馬鹿野郎、うちは酒屋だ、だいたいあんな若作りしたカッコができるか。

瞬 カッコがいやなのか。

直美 頭ツルツパゲじゃない？古風なカッコが似合うと自分で思つてるのよ。

瞬 めんどくさいね。

直美 めんどくさいのよ。すぐお酒のうんちくとか語りだすし・・・あ、うんちく。

瞬 なに？

直美 お酒に詳しいお客さんが来るとすごい嬉しそうよ。辛口だとか本醸造だと

か、張り切ってうんちく語って。

瞬 ああ、そういうのは仕事の楽しみだよ。

直美 そういうお客さんがいっぱい来ればいいんだけどさ、一週間にいつペンぐ

らいなのよ。来る人決まってるし。

瞬 そう。

直美 そんなもんよ、うちみたいな普通の酒屋は。将来性ないっていつもぼやいてる。

瞬 そうい話したら盛り上がるかな。酒屋の将来性。

直美 ダメよ、かえって沈んじゃうわよ。もっと差しさわりの無い楽しい話題が

いいんじゃない？野球とか演歌とか。

瞬 野球も演歌も知らないよ。

直美 じゃあ銭湯。

一分ぐらいで終わっちゃうんじゃないかな。

直美 難しいわね、カレシが親と話すのって。

瞬 みんなどうやってんのかな。

と、二階から澄江と諒子が降りてくる。写真屋でくれるシート式の簡易なフォトアルバムを一冊づつ持っている。諒子はうちわで扇ぎ

ながら。首に手ぬぐいを巻いている。(二人の会話の間、直美と瞬は酒屋のパンフレットを見てる)。

澄江　じゃあどうもありがとう。助かった。

諒子　だけどこんな大昔の写真、何に使うのよ。

澄江　懇親パーティーの余興よ。新人時代の写真をプロジェクターで映してから
かわれるわけ。新役員は全員そのイケニエになるの。

諒子　言われるわよきつと。ずいぶんお変わりになりましたね。

澄江　あんたほどじゃないわよ。

諒子　似たようなもんよ、変わり方としては。

澄江　そんなことないわよ、見てよ、いい？(アルバムを開き)これが、こうで
しょ？これが。こう。落差としてはあなたのほうが大きいわよ。

諒子　そうかな。

澄江　というかあなた、このひと月ぐらいで急に老けたわね。

諒子　マジマジと見ないでよ。

澄江　生気がないわよ、ぐったりしてる。

諒子　早くも夏バテなのよ。

澄江　だいたいその首に巻いた手ぬぐいなんなのよ。やめなさい。野良仕事のお
ばあさんみたいだから。

諒子 便利なのよ、汗拭くのには。

澄江 なんだかもうすっかり女やめましたって感じよ。あれどうしたのよ、ドルフィン。

諒子 (直美たちを気にしながら) もういいのよそのことは。

澄江 え、だってムラムラするって、

諒子 しないのよもう。どうでもよくなっちゃった。

澄江 なんかあったの？

諒子 ないわよ。だからいいのよ、手ぬぐい首に巻いたって。

澄江 やけっぱちみたいに老け込んでどうすんのよ。歳じゃないわよ、気持ち一つよ、女は。

諒子 わかっているわよ、がんばります。さ、忙しい役員殿は早く会社に戻らねば。

澄江 じゃあ借りてくわね。

諒子 こっちはいい？

澄江 うん、ありがと。(二冊だけをバッグにしまう)。

諒子 盛り上がるというわね、パーティー。

澄江 報告するわよ、どれぐらいウケたか。

諒子 ハハハ。

澄江 (直美たちに) おじゃまさまでした。

直美・瞬 どうも。

澄江
じゃあまた。
また。

澄江、上手裏路地のほうへ去る。

諒子
・・・ごめんね。相談あったのにね。

直美
あ、相談してほじやないんだけど。

瞬
僕の基本方針についてなんですが、

諒子
基本方針？

瞬
直美ちゃんのお父さん、このごろ僕がうちに入入りすることは黙認してく

れるようになったんです。

そう、よかったじゃない。

瞬
だけどあくまでも黙認であって、一言も喋ってはくれないですよ。

直美
挨拶もね、あー、とか、うー、なの。

瞬
照れくさいのよきつと。最初に怒鳴った手前もあるし。

瞬
で、悩んでるのは、僕はお父さんに近づかないほうがいいんしょうか。それとも、積極的に話しかけたほうがいいのか、ということなんですけど。

諒子
ああ、それあたしはね、瞬君のほうから積極的に行ったほうが良いと思うわよ。

直美
そうかな。

諒子
一番だいたいなのは、仲良くしたいって姿勢を見せることじゃないかな。親子関係でも、客商売でもね。

瞬
でも返事してくれなかった気まずいじゃないですか。

諒子
そこをひるまずやり続けるのよ。一言でもいいんじゃない？お天気いいです、とか、お酒って種類いっぱいあるんですね、とか。

瞬・直美
ああ・・・。

諒子
そしたらいずれ返事してくれるわよ、いくら頑固親父でも。

瞬
わかりました。

直美
基本方針決まったね。

諒子
麦茶でも飲んでく？

直美
あ、いいです。その代わりに、ちょっとそれ見せてくれます。昔の写真ですよ。

諒子
いいわよ、恥ずかしいけど。(アルバムを渡す)

直美と瞬、アルバムを開いて見て、

直美
あ、諒子さんだ、若い。

瞬
何年ぐらい前ですか。

諒子 二十五年ぐらいかな。変わったでしょ。

直美 ・・大きくなったよね。

瞬 うん・・貫禄ついたって言うか。

諒子 いいわよ、言葉選ばなくても。

直美 みなさん同期ですか。

諒子 先輩や上司もいるわよ、仕事の打ち上げ。

直美 この中に好きだった人います？

諒子 やあねえ、なんでそんなこと聞くのよ。

直美 だって聞きたいじゃないですか。

諒子 いるわよ。

直美 どの人？

諒子 秘密です、それは。

直美 だって。

瞬 そろそろ行こう。とりあえず今日は一言話しかけてみる。

直美 うん。

瞬 ありがとうございます。

諒子 がんばって。

直美 おじやまさまでした。

諒子 さよなら。

瞬、直美、上手路地裏のほうへ退場。
諒子、アルバムを手に取り開く。

諒子

・・・

と、店の戸が開き、繁男と田村直樹が入ってくる。直樹は鞆を手にしたスーツ姿。繁男は打ち水をしていたのである。

繁男

どうぞ。

田村

こんにちは。

繁男

女将さん、お客さんですよ。

諒子

はい。いらっしやいませ。(応対に出ようとアルバムや帳簿をちゃぶ台に)。

田村

(シヨウケースを見て) いろいろありますねえ、みんなうまそうだな。

繁男、打ち水の道具を手に厨房から、

繁男

面白い人でね。打ち水しながら話弾んじゃった。

諒子

そう。

諒子、厨房ごしに店内でショウケースを覗く客を見る。

諒子

！

諒子、どぎまぎしながらアルバムを開き、目当ての男の写真を見つ
け、

諒子

・・。

一番売れるのはどれですか。

田村

そうですねえ、この季節は水ようかんですかねえ。

田村

水ようかんかあ、水ようかんもいいなあ。

繁男

あとは葛桜、あじさい、岩清水、青楓、雲の峰・・。

田村

へえ、名前聞いただけでも涼しそうだな。

繁男

古今集や万葉集からも題をもらったりもしますよ。一生勉強だね、葉子は

田村

すごいもんだなあ。

諒子、事務室の方から、

諒子 田村さん。

田村 え、あ、諒子・・

諒子 びっくりよ。

田村 僕だってびっくりだよ。

諒子 ともかく上がってよ。(茶の間のほうへ)

田村 うん、失礼します。(事務室から上がり茶の間へ行きながら) いや、ほん

とびっくりだ。

諒子 ほんとびっくり・・どうぞ。

田村 うん。

二人、ちゃぶ台を間に座る。繁男、厨房から、

繁男 知り合いだったんだ。

諒子 うん、会社時代の先輩。

田村 あ、田村と申します。いや諒子さんがね、和菓子屋継いだって話は聞いて

ただけど、それがまさかここだとは、

繁男 そりゃびっくりだ。

田村 びっくりですよ。

諒子 ほんとびっくり・・。

諒子と田村、(びっくり言いすぎだよね)という感じで笑う。

繁男

水ようかん包みますか。

田村

ええ、あ、せっかくだから食べていこうかな。

繁男

はい。

繁男は店内へ。諒子、茶を入れながら、

田村

改めて、久しぶり。

諒子

こちらこそ。何年ぶりかな。

田村

十・七年ぐらいかな、二人で最後に会ってからだ。

諒子

そうね、十七年……。今日は？このへんよく来るの。

田村

いや、よくってわけじゃないけど、老舗の洋食屋があるだろ。

諒子

ああ、フランス亭。

田村

たまに寄ってたんだよ、オムライスが好きで。

諒子

そうなんだ、今まで会わなかったわね。

田村

いつもは通り過ぎるんだけど今日は職人さんが打ち水してたから。

諒子

じゃあ会えたのシゲさんのおかげね。

田村

シゲさんと言うんだ、あの人。

諒子 うん。

田村 おつかない顔してるけど、お菓子の話になったら急にお喋りになったよ。

諒子 そういう人なのよ。

繁男 なんか言いました？

田村 いえいえ、ハハ。

諒子 どうぞ。(茶を出す)

田村 ありがとう。

諒子 ご家族はお元気？

田村 うん、娘と三人で暮らしてるよ。

諒子 そう、娘さんおいくつ？

田村 十五だよ。今年高校に入った。

諒子 そう。

田村 君は？結婚・・

諒子 してないの。たぶんもうしないかな。

田村 意外だな、君みたいなのが。

諒子 どういうのよ、あたしみたいって。

田村 だって、充分きれいだし・・

諒子 ・・。

諒子、お茶を一気に飲み干し、厨房に向かつて、

諒子

シゲさん、水ようかんまだー。

繁男

はい、いますぐー。

諒子、自分の茶を入れながら、

諒子

そんなこと言ったら、あなたも変わらないわよ。

田村

そんなことないよ、年取ったよ。

諒子

あのころはバリバリだったわね、営業で仕事のできる男といえばあなただ
ったわ。いまもバリバリなんでしょう？

田村

昔ほどじゃないよ。まあ、僕なりにはやってるさ。

と、厨房から繁男が水ようかんの皿を載せた盆を差し出し、

繁男

はい、どうもお待ちどうさまでした。

田村

お、きた。

諒子

はい、どうぞ。

諒子、盆を受け取り、田村の前へ。

田村　　なんだか贅沢だね、和菓子屋の茶の間で食うなんて。

諒子　　よかったら、これからもちよくちよく寄ってよ。

田村　　そうだな、これからはカツレツじゃなくて水ようかん目当てに来るよ。

諒子　　うん。そうして。

田村　　いただきます。

音楽。田村、水ようかんを食う。諒子、それをときめきを覚えながら眺める。

諒子　　（NA）三十三から三十五まで、二年、この人が恋人でした。
今までの、一番の恋だったのよ、お母さん・・・。

暗転。

【四場】

夏の宵。(7時ごろ) 前場よりひと月ほど後。時折、ひぐらしが鳴いたり。茶の間、ちゃぶ台の前に国男が座っている。店では繁男がのれんをしまったところ。国男はやや苛立っている。

国男 女将さん、いつ帰ってくるかな。

繁男 そろそろじゃねえかな。お茶会のお菓子、届けに行ったんだよ。なんか相談ごとかい。

国男 おう、インターネットの野郎がよ、

繁男 ああ、直美ちゃんのボーイフレンドか。

国男 最近よく、俺に喋りかけるようになったんだけど、何言ってるんだかさっぱりわかんねんなんだよ。言ってること、紙に書いて持ってきたんだけどさ、ブログ、アップ、リンク、

繁男 わかんねえよなんだか。

国男 だろ。カミさんもわかんねえって言うからさ。聞いてみようと思ってるな。聞きやいいじゃねえか、インターネットに。

国男 そんなのでつきかよ、まるで俺がモノ知らねえみたいじゃねえか。
繁男 知らねえんだからしょうがねえだろ。じゃあ直美ちゃんに聞けよ。

国男

それも悔しいんだよ。シャツポ脱いだみてえだよ。

繁男

強情っぱりだなあ。あきれちまうねえ、どっこいしよと。(縁側に寝そべる)

国男

なんだよシゲさん、珍しいな。夏バテかよ。

繁男

ああ、なんだか最近、一日終わるとくたびれちまってな。

国男

歳だよもう。いくつになつた。

繁男

さああな、忘れちまったよ。

国男

九十ぐらいか。

繁男

そんなじゃねえよ、七十六。

国男

じゃあ最初ツから言えよ。

繁男

言いたくねえんだよ、考えたくもねえや。

国男

別れたカミさんの間にさ、息子いるんだろ。もう立派だろ。課長か部長に

繁男

はなつてんじゃねえのか。面倒みてもらえよ。

繁男

できつかよ、もう何十年も会つてねえんだよ。それに第一、仕事やめたら

国男

何していいかわかんねえや。菓子しかねえからな、俺には・・・。

国男

そうかもしんねえな。職人さんは特にそうだよ。働いてるから元気なのか

国男

もしんねえなあ。俺もそうだなあ、いくら景気が悪いって言ってもやめよ

国男

うと思つたことは一度もねえもんなあ。ほんとだよ、やめたら何やってい

国男

いかわかんねえんだよ。これが日本の男かなあ・・・。

繁男を見ると、縁側に寝転がり、ひじを枕に眠ってた様子である。

国男
おいシゲさん、シゲさん・・(苦笑)

ひぐらしの声。国男、そのあたりにあったタオルケットを取り、繁男の体に掛けてやる。と、店の戸があき、塚田が書類封筒を手に登場。

塚田
こんばんは。
国男
はーい。

塚田、事務室から茶の間を覗く。

国男
おう、ドルフィン。
塚田
あれ、女将さんは？
国男
買物らしいよ、すぐ戻るってさ。
塚田
そうですか、待たせてもらおうかな。
国男
おう、いっしょに待ってようよ、俺も用事あってさ。

塚田

はい、じゃあ。

塚田、事務室から茶の間へ。縁側で眠るシゲを見て、

塚田

どうしたんすか。

国男

夏バテした年寄り。

塚田

ああ。

国男

そりゃこたえるよ、今年は暑いからなあ。で、女将さんになんの用事だよ。

塚田

商店街のイベントのことですよ。俺と女将さん委員なんで。

国男

ふうん、で、それなんだよ。

塚田

アイデア、ワープロで打つてみたんですよ。だから渡そうと思って。

国男

じゃあ、俺渡しといてやるよ。

塚田

え、いいつすよ、自分で渡すから。

国男

いいよ、だって渡しにきたんだろ。

塚田

ええ、まあ。

国男

渡せば用事はすむんだろ。

塚田

まあ、そうすねえ。

国男

じゃあ渡しとくよ、君だって店あつて忙しいんだらうからさ、

塚田

いやだいじよぶつすよ、店バイトいるし。

国男　なんでそんな自分で渡したいの？

塚田　だってほら、渡すとき、一言二言説明したほうが、

国男　そんなこと言って、

塚田　なんすか。

国男　女将さんに会いたいんだろ。

塚田　そんなことないっすよ。

国男　またまた、そうでなきやこの時間に来ないよ。こっちの店が終わって、女将さんとゆっくり話せる時間を見計らってきたんじゃないのかね、ドルフィン。

塚田　・・なんでわかんすか。

国男　ほら見ろ、白状しやがった。

塚田　いや俺ね、前は全然興味なかったんすよ。だけどこのひと月ぐらいで急にきれいになった感じしません？

国男　そうなんだよ、うちのかみさんも言ってるんだよ、エステでも行ってんじやねえかつてき。

塚田　変わりますよね、女の人って。

国男　で、なに、付き合おうとかそういう気あんの？

塚田　いやいや、それはないっす。俺彼女いるし。

国男　なんだよ。

塚田 だけど会つてると、なんか楽しいんすよ。こっちまで元気もらえるみたい
な。

国男 そうだよな、きれいな女の人がいるとき、意味なく元気になっちゃうんだ
よな、男は。

塚田 そうなんすよ、(封筒を示し)だから俺張り切っちゃつて。

国男 エステいかすかなあ、うちのカカアも。ハハ。

塚田 無駄ですよ。

国男 ハハ・・・おい。

と、勝手口から諒子登場。食材などを入れたエコバッグを持ってい
る。

諒子 ただいまー。

国男・塚田 おかえりなさい。

諒子 あら？

諒子、茶の間を覗く。

国男・塚田 おじゃましてまーす。

塚田 ワープロ打ち渡そうと思って。

国男 俺はちよつと相談があつて。

諒子 あ、そう。あれえ？

国男 寝ちやつたんだよ、俺と喋ってるうちに。夏バテらしいよ。

諒子 ああ、ちよつと頑張っちゃつたのよねえ、蛍の夕べのお茶会のお菓子。け

つこう数があつたから・・ちよつとシゲさん、シゲさん・・

繁男 むにやむにや・・あれ？あ、俺寝ちやつたか。

諒子 疲れてんのかな、頑張ってくれたから。

国男 前は弟子みたいな人がいたのになあ。

諒子 松さんでしょう。田舎に帰っちゃつたのよ。実家の和菓子屋継ぐつて言っ

て。後継ぎだったお兄さんが病気で倒れちゃつてね。

塚田 去年あたりまでは若い奴がいましたよね。

国男 ああ、三郎つて言つたつて。

繁男 あいつは駄目だよ。寝坊ばかりしやがつて。辛坊がきかねえんだよ、最

近の若い奴は。

諒子 いいわよもう、ほら、お願いだから帰つて休んで頂戴よ。

繁男 はいはい、帰りますよ、さつさと・・。

と、言いながら繁男、事務室から店内を通り厨房へと向かう。

その間に、

国男 まだアパート住まいかい。

諒子 そう。

国男 ここに住み込んじゃえば楽なのにな。

諒子 その話は何度もしてんのよ。だけど遠慮しますって。

塚田 なんで。

諒子 女の一人住まいにめっそうもないって。

国男 ハハ、古風だねえ。

国男、厨房から声をかける。

国男 じゃあ、今日はこれで。

諒子 あ、シゲさん、ちよつと待って。

国男 へえ。

諒子、エコバッグから新聞紙に包んだ長芋を取り出し、

諒子 長芋、これ持っててよ。

国男 え、なんすか。

諒子 元氣つけてってことよ、シゲさん動けなくなったら、この店やってけない

んだから。

国男 そうすか、そりやどうも。おつかれさまでした。

三人 おつかれさま。

繁男、長芋を持って厨房の戸口へ退場。

諒子 で、なんなの？酒屋さんの相談は。

国男 インターネットのことなんだけどさ。

諒子 ああ、瞬君のこと？

塚田 誰すか。

諒子 直美ちゃんのボーイフレンド。

塚田 ああ。

諒子はエコバッグを持って台所へ。買ってきた素材などを卓に出したり。塚田と国男の会話はその間も続いている。

国男 オタクなんだよ、直美とインターネットで知り合ったらしくてな。

塚田 ああ、ミクシーとかそういうんでしょ、オフ会かなんかで話盛り上がった。
国男 君まで言うなよ、謎の言葉を。

諒子 (台所から) で、どうしたの瞬君が。

国男 またわけわかんねえこと、ズラズラ喋りやがんだよ。だから何言ってるんだか、俺は何返事していいもんだか、相談したくてな。

諒子 (台所から) んー。

国男 メモしたんだよ、忘れねえうちにさ、言うぞ。(メモを見ながら) ブログ、アップ、リンク、ネットショップ、グルグル、ヤッホー・・ああー、気持ちわりい。

塚田 なんの話してたんすか。

国男 うちの売り上げだよ。よくないみたいですねえ、なんて言うからよ、うるせえ、てめえに言われたくねえやって言ってやったんだよ、だけどまだぶつぶつ言いやがってな、お酒のうんちくを聞きたい人はいっぱいいるはずだから、そういう人と会おうためには、

塚田 (メモを見ながら) ああ、インターネットで通信販売をやるうってことですよ。

国男 え？

塚田 ブログって言うのは日記みたいなもんです。酒屋さんがお酒のうんちくを話題にした日記を書いて、ほかのページとも結びつけて宣伝をして、酒好

きな人を集めようってことですよ。で、インターネット上に開いたお店で通信販売すると。

諒子、塚田のセリフの途中から、茶の間のほうに戻ってきている。

諒子 ああ、それいいじゃない。日本中のお酒の好きな人がお客さんになるわけだ。

塚田 そういうこと。

国男 だけど、お客とじかに会わねえんだろ。

諒子 そりゃそうよ、通販だもの。

国男 邪道だな、客と顔合わせて売り買いするのがほんとの商売だろ。

諒子 あのね、頭古すぎ。シーラカンス。
え。

国男 シーラカンスどこじゃないわよね。

塚田 三葉虫ぐらいつすね、虫みたいな奴。

国男 虫か俺は。

諒子 虫よ虫。酒屋科、オヤジ目、ツルッパゲガンコ虫。

国男 なんだよそれ。

諒子 古臭いのはしょうがないわよ。あたしだってついていくのが精一杯。だけ

国男

ど酒屋さんの一番よくないところはね、瞬君とちやんと話をしようと思わないところよ。いい子じゃない。直美ちゃんのお父さんと仲良くなろうと思って、お店のこと一生懸命考えてくれたのよ。通販やるかどうかは別にしても、受け止めてあげなきゃいけないのはそのことよ。(メモ用紙を国男に突き出し) はい、持って帰って瞬君と話しなさい。ここに書いてあるのはね、インターネットのことじゃないの。瞬君と仲良くなるための言葉よ。わかったよ。(メモを取り) かなわねえな、そういうこと言われたら。

諒子と塚田、顔を見合わせ笑う。と、路地裏のほうから、光代登場。

光代

すみません、うちの来てます？

国男

おう、なんだよ、いま帰るところだよ。

光代

地上げ屋が来たよ。

国男

え？土地売っていうのか？

諒子

いや、そこまでは言わないけどさ、このへん開発の話があるんだけど、もしそうになったらおたくどうしますかって。

諒子

様子見に来たのよ。ドルフィンは。

塚田

うち来てないす。

諒子

うちも。

光代 繁盛してないところから狙ってくるんだよ。渡りに船と飛びつくんじゃないかと思つてさ。

国男 ちくしょう、みくびられてたまるか。まだいんのか。

光代 帰つたよ、また来るつて。

諒子 こんどきたら塩まいて追い返してやりなさい。迷つてるとこ見せたらつげ
こんでくるわよ。

国男 おう。

光代 だけど繁盛してないよ。

国男 わかつてるよ。

光代 ほんと繁盛してないんだよ。困っちゃうね、どうすりや繁盛すんだろうね。

国男 お前、困つた顔するとほんとひでえな。エステいけよ。

光代 え？

国男 いくぞ。じゃおじやまさま。

光代 ちよつとあんた。

諒子 がんばつてよ。

国男と光代、路地裏のほうへ走つて退場。

諒子 きな臭くなつてきたわねこのへんも。商店街団結しなきゃね。

塚田 諒子さん、かっこいいな。

え？

塚田 いや、大人の女って感じだよ。小股の切れ上がったっていうか。何言ってるの。で、なんだっけ？

塚田 あ、こないだ打ち合わせしたアイデア、ワープロ打ちしたんで。あ、ありがとう。あとで見とくわ。

塚田 え、いま見てくださいよ。直すとこあれば直すし。

諒子 ゆっくり見るわよ、直すとこあれば赤入れていくから。

塚田 そうすか。

諒子 さ、お店戻ってよ。バイトの子ひとりでしょ。あ。

塚田 なんすか。

諒子 ドルフィンはアルバイトの年齢制限あるの？

塚田 え、諒子さんうちでバイトするんすか。

諒子 いろんな可能性を考えておかないとねえ、シゲさんもあの調子じゃあ、いっとうなるかわかんないし。

塚田 悪いんすけど、30までなんすよ。

諒子 30.

塚田 ええ。爽やかな潮風のイメージで売ってるんで。

諒子 52だとイメージ合わないか。

塚田 一般的には、みぞれまじりの北風って感じすかねえ。

諒子 寒いわねえ。

塚田 あ、諒子さんじゃないすよ。一般的にはってことで。もし諒子さんやってくれるなら特例ってことで、

諒子 いいわよ無理しなくても。じゃあ、ああいうのはどうかしらねえ、ハンバーガー屋さんとか。

塚田 ああ、中高年のバイトいますよねえ。

諒子 時給それぐらいかしら。

塚田 800円ぐらいじゃないすか。

諒子 800円・・・。

塚田 いま厳しいすよ、大学生も就職難でしょう。

諒子 ありがと。勉強になった。じゃ。

塚田 あの、

諒子 なに？

塚田 俺、こないだ失礼なことしちゃったかなと思って。

諒子 何よ。

塚田 沖繩旅行とか、俺、ありえないみたいなこと言っちゃったけど、ありえないことはないすよねえ。

諒子 何言ってるのよ冗談よあれは。どつきり企画よ、忘れてよ。

塚田 はい・・・そうします。(店へ)

諒子 じゃあね、読んどくから。ありがとね。おつかれさまでした。

塚田 はい。おつかれました！

塚田、店の戸へ退場。

諒子 ……

諒子、台所のほうへ行こうとする、と、店の戸が開き田村登場。
手にはおもちや屋の袋。

田村 こんにちは。

諒子 あら、いらつしゃい。

田村 いや、ちよつと近くまで来たもんだから。

諒子 上がつてよ。

田村 すぐ帰るよ。ちよつとだけ。

諒子 どうぞ。

田村、事務室から茶の間のほうへ。

諒子 なあに？このへんに用事？

田村 ああ、そのどじょう鍋屋で宴会があるんだ。その前にこれだけ渡そうと

思つて。(おもちゃ屋のふくろを差し出す)

諒子 あらなに？

田村 花火だよ。こないだいっしよに花火大会に行つたら。あの時、線香花火し

たいつて言つてたじゃないか。だから・・・

諒子 偶然。

田村 え？

あたしも今日買ったのよ。

田村 ほんと？

諒子、台所へ行き、さきほどスーパーで買つてきた花火の袋を持つて、再び茶の間に戻る流れで。

諒子 スーパーに寄つたら見つけたの。だから買つちやつた。久しぶりよ花火買うなんて。打ち上げ花火は怖いから、なるべく可愛い花火だけ入つてるのにしたのよ。

田村 そう、偶然だなそりゃ。

諒子 楽しかったわ、花火大会。線香花火見ながら思い出そうと思って。

田村 うん。

諒子 浴衣着て出かけたのも久しぶりだったし。

田村 よく似合ってたよ。

諒子 あとでちよつと後悔したの。ケータイで写真撮ってもらえば良かったなあ
って。

田村 ほんとだよ、僕もあとでそう思った。

諒子 だけどやっぱり撮らなくてよかったかな。写真一枚じゃ、足りないぐらい
楽しかったから。

田村 そう、よかったよ。

諒子 こういつちやなんだけど、昔付き合ってた頃より楽しいわ。

田村 ほんと？

諒子 だって昔は、デートのたびに、いろんなこと気にしてたもの。この先あた
したちはどうなるんだろうとか、あなたは結婚する気があるのかしらとか、
あたしはどうかしらとか。

田村 うん。

諒子 いまは先のことを考えずに、その日のデートだけを楽しめる感じなのよ。
そうだね。

田村 お店のこととか、いろいろ考えなきゃいけないことはあるけど、忘れられ

るの。感謝してるわ。

田村 お互い様だよ。こんな思いができるのも、シゲさんの打ち水のおかげだね。

諒子 ほんとね。

二人 (笑う)

と、路地裏のほうから直美が現れていた。

直美 あの、

諒子 あら直美ちゃん、

田村 あ、お客様かな。失礼するよ。(立って事務所のほうへ)

直美 あ、いえ、すいません、あたしのほうこそ、

諒子 いいのよ、この人、もう帰るところだったの。

店に降りる田村を諒子、見送りながら。

諒子 ほんとどうもありがとう。

田村 いえいえ。じゃあまた。

諒子 また。酔っ払いすぎないでよ。

田村 うん、気をつけるよ。さよなら。

諒子 さよなら。

田村、店の戸に退場。

諒子 ごめんなさい。なあに。

直美 一言だけ、お礼言おうと思ったんです。

諒子 お礼って？

直美 お父さん、うちに帰ってうるなり、インターネット、こんどいつ来るんだって聞いたんです。たぶん日曜日には来るよって言ったら、じゃあ、こんどはじっくり話すかって。ブログのことを聞いてみるって。

諒子 そう。

直美 諒子さんがお説教してくれたそうじゃないですか。だから、お礼を言いききました。

諒子 やあねえお説教なんて。でもよかったわ、わかってくれたなら。

直美 ああ、いまの人、

諒子 え？

直美 もしかして、写真に載ってた人じゃないですか？この中に好きな人はいますかって聞いた時。

諒子 それは秘密です。

直美

また？

諒子

いいでしょ、女も五十も過ぎれば片手じゃ足りないほどの秘密がござい
ます。

直美

では今日は聞かないでおいてあげます。お礼言いにきて突っ込むものな
かね。

二人、笑う。

諒子

あ、直美ちゃん女同士でき、

直美

なんですか。

諒子

線香花火していかない？

直美

あ、いまの人に貰ったんだ。

諒子

そうよ、花火の君。

直美

やっぱり怪しいなあ。します。

諒子、縁側に灰皿を置き、線香花火を袋から出す流れで。

諒子

線香花火、好きなのよ。

直美

あたしも好き。なんでだろう。

諒子 ちりちり言ってるの見てると、いろんなこと思い出すのよねえ。子供のときのこととか。

直美 ああ、夏休みのこととか。

諒子 そう、電気消すわね。

直美 うん。

諒子、部屋の電気を消し、灰皿の上で、線香花火に火をつける準備をして、

諒子 じゃあ、いきます。

直美 うん。

諒子、火をつける。

諒子 この音がいいのよねえ、ちりちり、

直美 ちりちり・・ほんと、思い出す感じ。

諒子 でしょう？

直美 プールのこととか、

諒子 うん、

直美
絵日記のこととか、

諒子
うん、

直美
諒子さんは何を？

諒子
・・・秘密です。

二人、笑う。音楽。線香花火を見る諒子と直美。溶暗。

【五場】

明かり入ると、初秋（十月初め）の午後。

店ののれんは内側にある。（平日の定休日なのである）。

厨房の戸をあけ、普段着姿の繁男が小豆の袋を抱えて入ってくる。外には誰かいるらしく、その人物に声をかけながら。

繁男

ああ、じゃああとでな。女将さんそろそろ帰ってくるはずだから。うん、先行っててくれよ。悪いな。

繁男、小豆袋を厨房にいれ戸を閉める。そして受け取ったばかりの伝票を確認し、茶の間へ上がり、事務室へ。事務机のしかるべき場所に伝票を置く。と、店の戸をたたく音。

塚田

（声）すいませーん。

繁男

あ、すいません、今日定休日なんですよ。

塚田

（声）僕です。塚田です。

繁男

ああ？

塚田
繁男

(声) ドルフィンです。
ああ。

繁男、店内へ。戸の鍵をあけ、塚田を入れる。塚田は手に書類封筒を持っていく。以下、繁男は事務室から茶の間に入り、塚田は足は店内に置いたまま、事務室に身を乗り出し話す流れで。

塚田

こんにちは。

繁男

おう、どうしたの。

塚田

女将さんは。

繁男

ああ、ちよつと出かけてんだよ。

塚田

ええーっ。

繁男

なんか用かい。

塚田

ええ、これ持ってきたんですよ。こないだのイベントの報告書。ワープロ打ちしたんで、見てもらおうと思つて。

繁男

そうかい、じゃあ渡しておくよ。(封筒を受け取りちゃぶ台に置く)

塚田

あ、それから、近いうちにお疲れ会したいんですよ、イベントうまくいったんで。僕がそう言つてたつて軽く言つていてください。

繁男

おう、いいいけど、誰が集まんだい、そのお疲れ会。

塚田 僕と諒子さんですよ。

繁男 え、二人だけ？

塚田 そりやそうですよ、中心になってやったのは僕と諒子さんですから。

繁男 それはお疲れ会っていうよりデートっていうんじゃねえのか。

塚田 お疲れ会ですよ、やだな、変なこと言わないでくださいよ。

繁男 ふふ、わかったよ、お疲れ会な。

塚田 お疲れ会です。じゃお願いしますよ。失礼します。

繁男 おう。

塚田、店の戸へ退場。

繁男 なにがお疲れ会だ……。しゃらくせえ。

繁男、店に降り、戸の鍵を閉める。

と、勝手口から諒子と田村が登場。一つつつデパートの紙袋を持つている。

諒子 ああ、狭いのよそこ、ハハ、裏からごめんなさいね。

田村 いやいや、ハハ。

繁男 おかえりなさい。

諒子 ただいま。

田村 どうも。

諒子 いまお茶入れるわね。

田村 あ、いいよ、すぐ帰るから。

諒子 だめよ、荷物持ってもらったのに。

田村 じゃあ一杯だけ。

諒子 そうして。

二人、茶の間へ。繁男は厨房に。道具の片付けなど簡単な仕事をしながら。諒子は茶の支度をする流れで。

繁男 デパートどうだった？

諒子 うん、けっこう人がいたわよ、平日だっていうのに。あれきつと買わないで見てるだけの人も多いわよねえ。

田村 ああ、奥さん連中の憩いの場だからね。

諒子 久しぶりに行ったかららびっくりしちゃった。最近のデパ地下ってなんでもあるのね。あそこで売ってる食べものだけ集めても立派なレストランが開けちゃうわよ。

田村 ほんとだね。

繁男 で、何買ったの。

諒子 うん、いろいろ買おうと思ったんだけどね、結局セーター一枚よ。

繁男 ああ。

諒子 あとこれ、(薄手の上品なマフラーを見せ) 買ってもらっちゃった。

繁男 へえ、いいじゃないですか。

田村 安物だけだね。

諒子 安物じゃないわよ、ちゃんとしたブランド物よ。

田村 じゃあバーゲン品だ、ハハ。

諒子 で、あとはデパ地下のものね。チーズとかパスタとか、

田村 あ、これ台所に置いとくよ。

諒子 ああ、いいいわよ、お客様なのに。

田村 そんなふう言うなよ、他人行儀だよ。

諒子 あらそう?ふふ。

田村、紙袋を持って台所へ。

諒子 なに?これ?(ちゃぶ台の封筒を取り)

繁男 ああ、さつきドルフィンが持つてきよ。報告書だつて。

諒子 ああ、ありがと。なかなかうまくいったのよイベント。予算にも収まったし。

繁男 あと、お疲れ会やろうって言ってたなあ。女将と二人で。

諒子 え、ドルフィンと二人？

田村、台所から上手廊下あたりに戻ってきて

田村 ドルフィンで誰？

諒子 ああ、近所のバーのマスターよ。(封筒を手に事務室へ行きながら) 三十三過ぎてんのに子供っぽいの、サーフィンなんかやっちゃって。

田村 へえ。

諒子 どうせお疲れ会やるなら、委員みんなで作ったほうがいいんじゃないかな。そう言っとくわよ。

繁男 ああ。

諒子 シゲさんもお茶飲む。よかったら一緒に、

繁男 あ、いま俺ね、そのこのコーヒー屋に人待たせてんだ。

諒子 あら、誰よ。

繁男 小豆屋のトシさん。

諒子 ああ。

繁男 今年いっぱい引退するらしくってねえ、店は息子に任せて。

諒子 そう、いくつだっけトシさん。

繁男 俺と一緒。七十六。

諒子 そう。

繁男 俺もそろそろかなあ。

諒子 何よ、また弱気なこと言って。

繁男 じゃあ。ちよつと行ってくる。

諒子 行ってらっしゃい。

田村 行ってらっしゃい。

繁男 ごゆっくり。

繁男、厨房の戸へ退場。

諒子 お茶どうぞ。

田村 ありがと・・弱気なこと言ってたね、シゲさん。

諒子 最近ちよつとね。今年は暑かったでしょう？夏バテしちゃって、それ以来、病院行ってるのよ。血圧の薬飲んでるみたい。

田村 そう。でも困るね、シゲさんが寝込みでもしたら。

諒子 しょうがないわよ、もしそうになったら、お店閉めるわ。ここまで頑張った

田村 　　んだから、父も母も納得してくれるわよ。
　　だけど、君はどうするの？

諒子 　　そこなのよ。いまからどつかよそで働くって言ってもねえ。みぞれまじりの北風だから・・・。

田村 　　え？

諒子 　　ううん、なんでもないの。いやあねえ、あなたといる時はこういう話はしたくないの。もっと楽しい話しましょうよ。

田村 　　じゃあ、温泉の話しようか。

諒子 　　温泉？いいわね。

田村 　　秋田にね、乳頭温泉ていうのがあるんだ。

諒子 　　にゆうとう？

田村 　　乳頭だよ。お乳の頭。

諒子 　　あら、やだあ、ふふ。

田村 　　いや、別にいやらしい温泉じゃないよ。雑誌で見たんだけどね、真っ白なお湯の露天風呂があつて、いかにも温泉らしいんだ。これからの季節はいちと思ふよ。どうかかな。

諒子 　　行こうってこと？

田村 　　うん。

諒子 　　二人で？

田村 もちろん。

諒子 どうかしらそれは。行ったら本物の不倫になっちゃうわよ。

田村 そうだね。

諒子 渡辺淳一の世界よ。どろどろよ。

田村 そうかな。

諒子 そうよ。失楽園よ。心中までいっちゃうわよ。

田村 そこまでいくかな。

諒子 いかないまでも重たいもの背負っちゃうわよ、あたしたち。あなた家庭が

田村 あるんだし。

田村 うん。

諒子 やめときましよう、花火やデパートでじゅうぶん。毎回初めてのデートみ

田村 たいな感じでいいのよ。そこが一番楽しいところだから。

田村 賢いね君は。かなわないよ。

諒子 たぶんずるいのよ。一番楽しいところをずーっと長引かせたいの。

田村 ああ、きまりが悪いよ、温泉なんていわなきやよかった。

諒子 言ってもらってちよっと嬉しいところもあるのよ。そこは複雑。

田村 ハハ、面白い人だね君は。帰るよ。

諒子 あ、今日はほんとごめんなさいね、会社あるのに。

田村 ああ、いいんだよ。夕方ちよっと顔出せばいいから。

諒子 あら、重役出勤？
田村 うん、まあ、そんなところだ。

と言いながら田村、勝手口へ。諒子、見送る流れで。

田村 ともかく楽しかったよ、僕もデパート久しぶりだったし。

諒子 また行きましようよ。

田村 こんどは銀座でも行こうか。

諒子 そうね、銀ブラもいいわね。

田村 じゃあ。

諒子 うん、ありがとう。

田村 また。

諒子 また。

田村、勝手口に退場。

諒子
・・。

諒子、茶の間に戻り、デパートの紙袋からマフラーを取り出し、嬉

しように撫でる。そして紙袋に戻し、それを持って階段へ退場。
と、上手路地裏のほうから、澄江と朝倉が喋りながら来る。朝倉は
鞆と紙包みに入れたワインボトルを持っている。

朝倉 え、知ってる人なの？

澄江 うん、会社の人なのよ、向こうは気づかなかったみたいけど。

朝倉 へえ、このへんに用事かねえ。

澄江 ていうかね、遠い昔の諒子のカレシなの。

朝倉 へえ、じゃあまた付き合ってるのかな。

澄江 聞いてみなきゃね。

と、階段から諒子が降りてくる。

諒子 あらいらっしやい。

澄江 どうも。

朝倉 こんにちは。

澄江 お店休みだったからこっちから来たのよ。

諒子 そうなのよ、今日定休日で。

朝倉 すいません、お休みのところ。

諒子
いえいえ、どうぞ上がってください。
朝倉
じゃあお邪魔します。

朝倉と澄江は縁側から茶の間へ。その間、諒子は湯飲みや急須を盆に載せ台所へ。

澄江
ねえ、いま田村さんとすれ違ったわよそこで。

諒子
え？

澄江
来てたの？そのお茶そうでしょ。

諒子
・・・そうよ。偶然ね。

澄江
あら偶然？また付き合ってるのかと思った。

諒子
違うわよ、お店来たのよ。

澄江
だけど今日、定休日でしょう？

諒子
うん、だからね、あたしお店の前掃除してたのよ。そしたら通りかかって、
澄江
ああ。

このへんで諒子は、先ほどとは別の急須と二つの湯飲みを載せた盆を持ち茶の間に戻りながら。

諒子
澄江
澄江
で、せっかくだから上がってお茶飲んでもらったの。
なんだ、そういうことか。

諒子
澄江
あんまり変わってなかったわ。会社でも忙しいんでしょ？
うーん、どうかな、一緒に仕事してないから、あんまりわかんないけど。

諒子は二人のために茶を入れる。朝倉は澄江に軽く目配せし、

朝倉
あの、諒子さん。

諒子
はい。

朝倉
友人にワインの輸入をやってる男がいますね、これ、そいつから手に入れたワインなんですか。

諒子
あら、いただけるんですか。

朝倉
もちろん、改めてお近づきのしるしに。

諒子
まあ、それは、ありがとうございます。あ、ちょうどデパ地下で買ったチーズがあるのよ。それ着にして一杯やります？

澄江
駄目よ諒子、あなたはお休みでも、あたしたちは労働時間中なんだから。

諒子
あ、そうだった。ハハハ。あとでいただきます。

朝倉
で、実はこれには魂胆がありましてね、

諒子
魂胆？

朝倉

ええ、諒子さんにいいお返事をいただきたいという魂胆ですよ。

諒子

なんの返事かしら。

澄江

朝倉さんね、あなたに、朝倉さんの会社で働いてもらいたいんだって。

諒子

え？

朝倉

会社案内もお持ちしたんですよ。(鞆からパンフレットを取り出しながら) 詳しいことはあとでじっくり読んでいただくとして、前にもお話ししたとおり、ソーラーシステムのプランニングと施工をやっております。ともかくいま伸びてますよ。一般家庭に加えて企業さんからの大型受注も増えています。で、どうにも人手が足りない。いや人はどんどん入れてるんですが、チームのリーダーになれるような人材が足りなくて困ってるんです。そんなことを澄江さんに話したらね、

澄江

諒子がいいんじゃない、って推薦したの。

諒子

なんでよまた。

澄江

だってあなたお店のこと悩んでたじゃない。いつまでやっていけるかしらって。

諒子

そりやそうだけど。だったらあなたがいいんじゃない？現役バリバリなんだし。

澄江

あたしはダメよ。せっかくいまの会社で女性初の役員待遇になったのよ。ここで降りちやもつたないわ。それに話聞いたらあなたにぴったりなの

よ。主にプロモーションを担当してほしいんだって。

諒子
プロモーション？

朝倉
ソーラーへの理解を深めていただいてセールスにつなげるための活動です。いま申し上げたような展示会や、お客さんを集めるイベントなども含まれます。そういうものは地元の商業施設と協力しあってやりますので、若い人には任せられません。

諒子
若くはありません！

朝倉
でしょう！

澄江
そんな大きい声で言わなくてもいいじゃないの。

朝倉
あ、すみません。

諒子
でもあたしなんかとつても、

澄江
何言ってるの。テカランデーシヨンの人が。

朝倉
そうですね、あの話思い出してピンと来たんです。発想が豊かで、説明が上手で、お客さんに信頼されて。そういう人こそぴったりなんですよ。諒子さんには適任だと思います。どうでしょう。可能性はありますでしょうか。でもあの、急に言われましたも。なにしろお店がありますし。

澄江
そうよね、でもすぐってわけじゃないのよ。

朝倉
働いていただくのは来年の春からでいいんです。もしご都合悪ければ、もう少し先でも構わないと思ってます。報酬も他社には負けない額をお約束

す。

朝倉

悩んでください。

諒子

悩むの好きなんです。他のこともいろいろひっくるめて悩んでみます。

朝倉

結構です。いずれにしてもお待ちします。

澄江

じゃあ今日はここまで。帰りましょ。

朝倉

そうだね。

澄江と朝倉は立ち上がり縁側へ。諒子は見送る流れで。

諒子

相変わらず忙しいのね。

澄江

季節の変わり目は忙しいのよ。新しいキャンペーンが次々と始まるから。

朝倉

じゃあ、お休みのところお邪魔しました。

諒子

いえ、こちらこそ。ワインありがとうございました。

澄江

悩んだら相談してね。

諒子

うん。

朝倉

では失礼します。

澄江

じゃあまた。

諒子

また。

朝倉

急ごうか・・・。

朝倉と澄江、上手路地裏のほうへ退場。

諒子
・・。

諒子、茶の間に戻り、パンフレットとワインを、手にし、嬉しそう
な表情。と、厨房の戸が開いて繁男が帰ってくる。

繁男
ただいま。

あら、わりと早かったわね。

繁男
ええ、トシさん、このあとも挨拶回りがあるっていうから。

諒子
どうだった？トシさんの様子。

繁男
さすがにちよつと淋しそうだったな。

諒子
そう。

繁男
あ、ちよつと便所・へへ、コーヒーってやつはたまに飲むと小便近くな
っていけねえや。

諒子
いやあねえ。

繁男
へへ・・。

繁男、笑いながら前を押さえて便所へと駆け込む。便所の戸が閉まる。諒子、それを少し淋しい気持ちで見送る。

諒子

・・。

諒子、もう一度、パンフレットを見て、仏壇へ向かう。鐘を鳴らし、手を合わせ、

諒子

お父さん、お母さん、もしあたしがこの店やめたら、怒る？虫のいい話だけど、許してくれる気もするのよ。ここまで、よく頑張ったなって。思いがけない話。とつても嬉しい話。去年のあたしだったら、すぐ断ってたかもしれない。だけど今日のあたしは、少しやってみたくなった。あたしはまだやれるかもしれないと思ったの。恋をしているからだと思う。元気なのよいまのあたし。五十二歳なんて、まだまだ若いわね。

と、便所の中で、ドンと音がする。

諒子

！

諒子、慌てて便所の前へ。

諒子
シゲさん・・・(戸を叩いて)シゲさん、シゲさん！

と、中から鍵のあく音が聞こえ、繁男が現れる。

諒子
シゲさん！だいじょうぶ？いま音がしたから。

繁男
ちよっと立ちくらみしちゃって、

諒子
すぐお医者さん行ったほうがいいんじゃない？きっと血圧かなんかが、

繁男、しゃがみこむように、上手廊下のあたりに、倒れる。

諒子
シゲさん！

諒子、繁男の傍へ。

諒子
シゲさん・・・！

音楽。諒子、繁男の体を動かしていいものか、どうか、戸惑い、慌

ていつる。暗転。

【六場】

暗転中、音楽をBGMに諒子のナレーションが聞える。

諒子

(NA)お父さん、お母さん、シゲさんの入院は一週間ほどですみました。退院する時、いまずぐ大事に至るわけではないけれど、仕事はしばらく無理ですってお医者さまに言われたわ。渋るシゲさんを説得して、うちの二階に来てもらって、私が看病とお世話をすることにしたの。当然、お店は休業です。こんなことは「笹本」の歴史で初めてかもしれないけど、仕方ありません。ごめんなさい。

舞台の一部に明かりが入り、勝手口から小さなコンビニの袋を持って諒子が登場。茶の間へ行き、帳簿や領収書、電卓が置かれたちゃぶ台の前に座り、袋から新品の電池を出して、電卓の電池を入れ替える。

その間もNAはつづく。

諒子

(NA)お店の戸には張り紙を出しました。「都合により、しばらく休業いたします」。この張り紙がいつとれるのか、とれる日が来るのか・・・。

ふだんなら、お客さんがたくさん来そうなお春日和の秋の日も、私はいつまでもつかと案じながらお金の算段をしています。

この間に、全体の明かりに。秋の午後である。店ののれんは店内にしまつてある。

諒子は、領収書を見ながら電卓を打ち、帳簿に書き込む作業。

階段から寝巻き姿の繁男が降りてきて、そんな諒子を見ている。

諒子、気づいて、

諒子 あらシゲさん、おなかすいた？おかゆあるわよ。

繁男 すまねえ。

諒子 何言つてんの。いまは休むのが仕事よ。お茶でも飲む？

繁男 いや、旦那たちにお線香を。

諒子 あらそう？じゃどうぞ。

繁男、仏壇の前に。繁男の思いつめた気配を和らげるように、諒子は電卓を打ちながらなるべく明るい声で話す。その間に繁男は線香をつける。

諒子

いま電池買いにコンビニ行ったらね、和菓子もずいぶん売ってたわよ。大福とか、羊羹とか。面白いのはね、パンの棚の横に置いてあるのよ。朝ごはんは大福食べる若い子もいるのかしら。いるかもしれないわね、いまは朝ごはんはラーメン食べる人もいるらしいから。ふふ、いろいろ勉強になるわよ。

繁男、鐘を鳴らし、手を合わせ、

繁男

旦那、先(せん)の女将さん、すまねえつ。俺のせいで、店が開けられねえつ。「笹本」の名前に泥を塗っちゃった。女将にも苦勞かけちゃって。すまねえつ。

諒子

シゲさん、そんなに力こめたら体に悪いわよ。

繁男

俺、自分が齒がゆくてさ、

諒子

気持ちわかるわよ。でもいまは体を休めて、気持ちをゆったり持ったな
いと。

繁男

つれえんだよ、金の苦勞もかけて。電卓たたきすぎて電池切れちゃったんだろ。

諒子

たまたまよ、電池切れたのは。それに貯金だっていくらかはあるんだから。シゲさんは心配しないでだいじよぶよ。

繁男

またあんこが作れるのかなあ。小豆の袋がまた担げるのかなあ。

諒子

シゲさん。もしも、きついようだった、無理にとは思ってないのよ。あたしたち、ここまで頑張ったんだから、(仏壇を見て)あの二人も許してくれるわよ。

繁男

店、閉めるってことかい。

諒子

まだ決めたわけじゃないけどね。そろそろそういうことも考えとこうかなあって・・・。

繁男

・・・。

諒子

ともかくいまは休んでよ。仕事のこととは忘れてさ。あ、退屈だったら、寝ころがってラジオでも聞いてたら？(と言いながら新聞を見て)えーといまはね、あ、NHKで落語やってる。面白いわよ、きつと。

繁男

・・・

繁男、軽く頭を下げて、階段へ去る。

諒子

・・・

諒子、階段の下まで言って二階に向かって、

諒子

おなかすいたら言っつね。すぐ支度するから。

諒子、ちゃぶ台に戻り、帳簿つけを再開する。

と、二階から落語放送の音が聞える。諒子、少しほっとして仕事を続けようとして独白。

諒子

シゲさんが倒れたことをちよつとラッキーと思ってるあたしがいるの。お店を閉めやすくなる。これは仏壇に聞かれちゃいけない話・・・ソーラーがぐんと現実味を増してきたわ。あたしは日本中を飛び回ってイベントを仕切る。そういうのあたしほんとは得意なのよ。だいたいバブルが似合ってたの。目が回るほど忙しくて毎日高揚感があつて。一千万単位の伝票切りまくってたの。和菓子屋の女将なんて真逆よ。こんな狭い世界に毎日毎日。退屈よ。伝票だつて150円と200円とか。この十一年、我慢してたのよあたしは。仏壇の前で親孝行な娘を演じてた。これからのよ、あたしのほんとの人生は。ソーラー。太陽がさんと降り注ぐ。シゲさんは、死なない程度に回復しないでほしい。もっと弱気になって。女将さん、俺はもう無理です。早くそう言っつて。そしたらあたし、シゲさんそんなこと言っっちゃダメって、形の上では引き止めるけど、ソーラー。私のサンシャイン・・・。

と、勝手口から田村の声。

田村 (声) こんにちは。

諒子 はい！どうぞー！

田村、勝手口のほうから現れながら、

田村 元気だね、

諒子 うん、元気出さなきやと思って。いろいろあるけど。

田村 ああ、そうだね。シゲさんは？

諒子 二階でラジオ聞いている。

田村 そう。じゃあジャマしちや悪いかな。

諒子 お茶入れるわよ。

田村 うん。

諒子はお茶を入れる流れで。田村は茶の間へ上がりながら。

諒子 お見舞いに来てくれたの？

田村 うん、シゲさんもだけど、君の様子を見にね。いろいろ大変なんじゃないかと思つてさ。

諒子 大変よ。保険も解約しようかと思つぐらい。

田村 少しなら貸せるよ。女房に内緒の口座だつてあるんだ。

諒子 あら、へそくり？

田村 景気がよかつたころの一時金や社内賞の賞金を、爪に火を灯すようにして貯めたんだよ。

諒子 使えないわよそんなお金。言わなきゃいいのに。初めつから貸す気ないんでしよう？

田村 いやあるよ。

諒子 いまは結構よ。もういよいよどうにもならなくなつたらお借りします。

田村 わかつた。

諒子 でも嬉しいわよ、そんなふうにつてくれて。月並みな言い方だけど、心の支えよ。

田村 お互いさまだよ。

諒子 こないだね、退屈だつたから昼メロ見てたのよ。

田村 うん。

諒子 よくあるでしょ？愛人が、奥さんから亭主を奪い取るような話。見てるうちにね、いつのまにかあたし、愛人のほうを応援してたわ。

田村

。。。

諒子

やな女になっちゃった、と思って。

田村

ちよつと怖いね。

諒子

ちよつと怖いわよ。

田村

その愛人、結局どうするの？

諒子

奥さんを殺そうとするんだけど、亭主が守ろうとしたから頭に来てね、勢いで亭主のほうを殺しちゃうのよ。

田村

かなり怖いね。

諒子

だいじよぶよ、あたしはそんなことしないから。

田村

したら大変だよ。

諒子

でもまあ、その時ちよつと自分でもびっくりしたのよ。あたしにも、そんな気持ちが生まれてるんだなあって。

田村

渡辺淳一？

諒子

いやだ、ハハ、そこまでじゃないわよ。デパートに行ったせいかな。

田村

なんで？

諒子

あの時僕夫婦に間違われたじゃない？。あたし店員さんに「奥様」って呼ばれて。

田村

ああ、そうだったね。めんどくさいから否定もしなかったけど。

諒子

ほんとはちがうんだってことがちよつと悔しかったわ。あの時に無意識に、

田村 あなたの奥さんにヤキモチ焼いたかも。

田村 想像したことある？もし、僕と結婚してたらって。

諒子 あるわよ。そしたらたぶんこの店は継いでない。あなたは婿養子にならないし。

田村 うん。

諒子 専業主婦にもならないで、会社つづけてたかもしれないわね。あなたは？僕もあるよ。共働きだったら、君は僕より出世して、

田村 ハハ、まさか。

諒子 ボーナスマ僕より多くて僕は肩身が狭い。

田村 そんなことないわよ、ハハ。

諒子 想像はいいね、なんでも笑い話になって。

田村 ほんとよ、やっぱり温泉だって行かなくてよかったわよ。そうかな。

諒子 そうよ、露天風呂であたしの裸見たらあなた幻滅よ。

田村 そうかもな、ハハハ。

諒子 ハハ・・・あたしって自虐的。

田村 じゃ。

諒子 あらもう？

田村、勝手口に向かい、諒子、見送る流れで。

田村

シゲさんには会わずに帰るよ。僕の顔を見てお菓子のことを思い出させても気の毒だからね。よろしく言っというて。

諒子

うん。今日も重役会議？

田村

ああ・・・居眠り会議だ。

諒子

ハハ。

田村

さよなら。

諒子

さよなら。

田村、路地裏のほうへ退場。

諒子

・・・

諒子、ちゃぶ台に戻る。と、路地裏のほうから澄江と朝倉登場。

朝倉は見栄えのいいフルーツ籠を持っている。

澄江

諒子。

諒子

あら。朝倉さんも。お見舞いに来てくださったんですか。

朝倉

ええ、例の件の感触を伺いがてら。

諒子

そうですね、あの、でも、お返事は年内のつもりでおりましたので、

朝倉

いやいや、せかすつもりはありません。お悩みの点でもあればざっくばらんにお聞かせいただきたいと思います。

澄江

またすれ違ったわよ。

諒子

え？

澄江

田村さんよ。あたしたちがその路地入ろうとしたらスーツと出てきたの。

諒子

そう、今までいたのよ。話した？

澄江

ううん、わけありな感じだったから。

諒子

やめてよ、そんなことないのよ。ともかくおあがりください。

朝倉

失礼します。これシゲさんに。

諒子

ああ、すみません。ご挨拶できるかちよつと見てきますね。澄江、上がってて。

澄江

うん、お茶入れとく。

諒子

ハハ、悪いわね。

諒子、フルーツ籠を持って階段へ退場。澄江と朝倉はちやぶ台へ。

澄江、勝手知ったるという感じでお茶を入れる流れ。澄江、田村と

諒子が飲んでいたと思しき湯飲みを盆に片付けながら。

澄江 ああ、このお茶飲んでたんだ。

朝倉 よつぼど仲いいみたいだね。

澄江 昔は熱々だったからね。やけぼつにくいに火がついちやったかな。あたしはあんまりお勧めしないけど。

朝倉 大人同士だよ。めんどうなことはあっても自己責任だ。

澄江 そういうことだけじゃないのよ。いまの彼の立場がねえ、会社で？

澄江 いろいろあるじゃない？サラリーマンは・・・それより皮肉ね。
朝倉 なに？

澄江 お見舞いのフルーツよ。だってあなたにしてみれば、諒子がこのお店閉めてくれたほうが嬉しいでしょ。でもシゲさんが元気になったらそれが遠のくわ。元気になってくださいって言ってんだか、あんまり元気にならないでって言うてんだか、複雑な思いのお見舞い。

朝倉 それはそれ、これはこれだよ。ともかく諒子さんが喜んでくれればいいんだ。

諒子、階段から降りてきて、

諒子 すみません。起きてはいるんですけどね、あんまり気分が優れないようで。
朝倉 いえいえ、ご無理なさらずに。

諒子 たいへん感激しておりました。くれぐれもお礼をと、

朝倉 どういたしまして。よろしくお伝えください。

澄江 で、どうなのよ、例の件。

諒子 ・・やってみたい気持ちはございます。

朝倉 そうですか。

諒子 以前の会社を、一番の働き盛りにやめたものですから、やり残したような
思いはずっとあったんです。澄江が張り切ってるのを見て、うらやましい
ような気持ちもありました。いただいたものを読ませていただいて、私な
りに参考になるような本も調べて、ぜひやってみたい仕事だなとは思って
います。

朝倉 ああ、じゃあ、いますぐでもお返事いただければ、

諒子 すみません、そこはもう少し待ってください。

澄江 お店のこと？

諒子 というよりシゲさん。ぶっちゃけ申し上げますとね、

朝倉 ぶっちゃけてください。

諒子 あたしからシゲさんに、お店やめるって言うのは辛いですよ。

澄江 わかる。お菓子しかないような人だからね。

諒子 で、いまシゲさん弱気になってるから、自分からもう無理ですって言い出すのを待ちたいのよ。

澄江 なるほどね、じゃあもつと弱気になればいいわね。

朝倉 今年の冬は寒いらしいですよ、夏暑かったから。

澄江 うんと寒いといいわね、年寄りには弱気になるわよ。

朝倉 おいくつですか。

諒子 76.

朝倉 もう充分ですよ、ご勇退の歳ですよ。

澄江 充分よねえ、あ、いま二人で言いにくいこうか。

諒子 いいわよ、かえって意固地になっちゃうから。

澄江 そう？

諒子 しぜーんとそういう気持ちになるのを待ったほうがいいと思うの。

澄江 そうね。

諒子 というわけで、もうしばらくお待ちいただければと、

朝倉 わかりました。でもよかったですよ、前向きなお気持ちは何えて。

澄江 正解よそれが、いい話だもの。

朝倉 あ、それから、一つご報告なんです、えー、これはですね、グッドかバ

ツドかという、私はグッドニュースだと思っんですよ。

諒子 あら、どういうことですか。

朝倉 昨日わが社に新たな発注があったんです。大口ですよ。

諒子 へえ、それはグッドですねえ。

澄江 でしょう？

朝倉 それがですね、この町の開発に関わる物件なんですよ。

諒子 あら。

朝倉 おそらくお耳にも入ってるかと思うんですが、この一帯を地上げして都市

型のショッピングモールをつくろうという、そういうプロジェクトが進行
してるようなんですよ。

諒子 ええ、聞いてます。

朝倉 で、そのコンセプトがエコモールということなんですよ。

諒子 エコモール。

朝倉 設計も建設資材も、すべて環境に留意していこうとわけです。当然、電力
も可能な限り太陽光でまかなおうということなんですな。

澄江 グッドでしょう。

朝倉 で、白羽の矢が立ったのがわが社なんですよ。幹事役の商社さんとは長い
お付き合いをさせていただいております、それが功を奏したんでしょう
なあ。単独指名ですよ。

澄江 グッドよねえ。

朝倉 さっそくプランの提出を求められてるんですが、屋上にソーラーパネルを

ズラーツと並べましてね、そこがわが社の常設ショウルームも兼ねてしま
うという、そういう名案を思いついたんです。

グッドアイデア。

できれば諒子さんにはそのプランニングから関わっていただきたいと
思ったんですよ。この町をよくご存知なわけだから、何か名案をいた
だけるんじゃないかと思いついてね。そういうわけで、ますますご活
躍いただけると思っていますよ。どうぞ、よろしくお願いします。

グッドな話ですよ。じゃ行きましようか。

そうだね。

ちよつと、

なに？

グッドじゃない。

グッドですよ。大口発注で単独指名でエコモールよ、そのうえ屋上がショ
ウルームを兼ねるのよ。

それはぜんぶグッド。だけど残った一つが最悪のバッド。

この町の、ということですか。

そうです。なんだか、地上げ屋の仲間みたいじゃない。

ちがうでしょ全然、ソーラーの話よ。

でもそのソーラーがつくのは、この町を地上げしたビルってことでし

澄江

朝倉

澄江

朝倉

諒子

澄江

諒子

澄江

諒子

朝倉

諒子

澄江

諒子

よ。

澄江 地上げは地上げ、ソーラーはソーラーよ。

諒子 わかんないそれあたし。気が進まないわよ、そんなビルのソーラー。

朝倉 ああ、ではそういうことであれば、ほかのエリアを担当していただくということで、

諒子 それも気持ち悪いですよ。屋上で宣伝してる会社の名刺をあたし持って歩くわけでしょう。

澄江 何細かいこと言ってるのよ。割り切って考えなさいよ。あなたにとっていい話なんだから。

諒子 無神経なこと言わないでよ、繊細な問題なのよ、この町に住んでるあたしにとつては。

澄江 ああ、変わったわねあんた。
何よ。

澄江 昔はもつとダイナミックに大きいキャンペーン動かしてたじゃない。ちっちゃい女になったわね、ちっちゃい世界に収まっちゃって。

諒子 あんたこそ笑っちゃうわよ、なによグッドグッドグッドって。ソーラーの味方して、あたしをその気にさせようとしたでしょう。上からモノ見てんのよ、ご出世されて。

澄江 馬鹿にした言い方しないでよ。あたしがどれだけ頑張ったか知りもしない

で。

諒子 知りたかないわよ。スポンサーに色目でも使った？

澄江 おいおいおいおい。

諒子 あ、ごめんごめん、言い過ぎた。

澄江 もう、ちよつと朝倉さん。

朝倉 何。

澄江 どうしてくれんよ、諒子と喧嘩になっちゃったじゃない。

朝倉 俺のせい？

諒子 だいたいどうしてこの人恋人にしたのよ。

澄江 だからカラオケよ。

諒子 そこが軽薄なのよ。

朝倉 心が通じたんですよ。(一節歌う)

澄江 (呼応して歌う)

諒子 もういいって。

と、二階から勢いよく繁男が降りてくる。

諒子 シゲさん、

繁男 女将、俺は仕事するよ。

諒子
ちよつとダメよ、休んでなきや。

繁男、厨房へ。諒子は追おうとするがその時、店の戸をどんと叩く音。

国男
（声）女将さーん、女将さーん、
諒子
はーい、何、酒屋さん？

男
と、言いながら、諒子、店の戸の鍵をあける。なだれ込むように国
と光代が入ってくる。以下、三人、事務所から茶の間へ入りながら。

国男
あー、いたー、良かったー。

諒子
何よ、お店休みだつて知ってるでしょう。なんでこっちから来るのよ。

国男
そこにクルマ停めたんだよ。

光代
配達途中で喧嘩になっちゃまってさ。

国男
だから間入ってもらおうと思つてさ。あれお客さん？

諒子
そうよ、いま込み入った話してて、

国男
いいよ、こっちは気にしねえよ。

光代 気にしないよ。

諒子 はいわかりました、なんの喧嘩？

国男 俺はやつぱりよ、直美とインターネットの交際に反対なんだよ。

諒子 あら、最近仲良くしてんじゃないの？

国男 いや、あいつ自体はさ、思ったよりオタクじゃねえんだよ。勇気振り絞って、俺に喋りかけてくれるしな。

諒子 じゃあいいじゃない。

国男 よくねえんだよ、あいつは酒屋つがねえって言いやがった。

光代 だからいやなんだってさ。

諒子 で、おかみさんのいいいぶんは？

光代 あたしはね、酒屋なんてこの人の代でやめちゃっていいと思うんだよ。

国男 こういふこと言うんだよ。

光代 だって、売れないよ。あたしが言うのもなんだけどコンビニのほうが便利だしさ。

国男 置いてある酒の種類が違うだろ。

光代 そこにこだわる人はめったにいないんだよ。もう古いんだよ、うちみたいな店は。だから地上げされてお金貰ったほうがいいだろ。

国男 馬鹿野郎、お前こないだまで、地上げ反対みたいなこと言ってたじゃねえか。

光代

おかみさん連中と話してたらみんな弱気なんだよ。こんなに儲からないなら店畳んでお金貰ったほうがいいかねえ、なんてさ。それ聞いてたらあたしもね。

国男

そんなことできつかよ、オヤジから継いだ店なんだ。

光代

そんなもん後生大事に守って何かいいことがあるのかよ。

国男

なにを！馬鹿野郎！（平手打ち）

光代

何すんだい。こんちくしょうつ。

光代も国男に挑みかかりひつかく。「いてて、やめろ、馬鹿」と言
いながら国男、たちまち劣勢である。

諒子

ちよっとやめなさい二人とも。落ち着いて、やめなさいって・・・。

朝倉

そうですよ、やめましょう乱暴は。

国男

なんだよあんた。

諒子

ソーラー屋さん。このへん地上げして建ったビルにソーラーパネルつけるんだって。

国男

なんだと、じゃあ地上げ屋の仲間か。

朝倉

ちがいますよ。

澄江

（諒子に）ちよっと、なんでそういう紹介の仕方すんのよ。

光代 (朝倉に) どれぐらい貰えるんでしょうかね。

国男 くらためえつ、

澄江 まったく頭固いわね、この町の人は。

国男 なんすか、あんた女将さんの友達だろ。

澄江 そうよ。諒子がね、この古臭い町と共倒れになるのを心配してるの。

諒子 やめなさいよそういう言い方。

澄江 自分に正直になりなさいよ。この町に引つ込んで、この店継いだこと、あんたちよつとは後悔してんでしよう。

国男 おいほんとかよ、あんたもこの町嫌いかよ。

澄江 諒子にはね、世の中を動かす才能があったのよ。それをわざわざ自分で封じ込めちゃったの。このお店のために。そりやしようがないこともあるわよ。老舗を守るってのはだいじなことだもの。諒子がやるしかなかつたんだもの。だけでもう充分やったわよ。時代は変わるんだし、シゲさん前みたいには働けないんだし。ちょうど今が潮時なのよ。なのになんかの朝倉さんの話を断るなんて。何に義理立てんのよ、お店？この町の人たち？そんなの振り捨てちゃいなさい。あたしたちもう若くないのよ。我慢はやめて思いつきり生きる最後のチャンスなんだから。

諒子 なによ、思いつきり生きるって。

澄江 そりや自分の可能性を使い切ることよ。

諒子

バリバリ働いて？

澄江

そう。

諒子

女だてらに出世して？

澄江

そう。

諒子

大きなプロジェクトを動かして。

澄江

そう。

諒子

シゲさんや酒屋さんや、家族みたいな人たちを裏切るようなことをして。

澄江

諒子。

諒子

あー、わかんないわかんない。何がいいのかわかんない。そうよね、昔のものが昔のまんま、必ずしもそれがいいってわけじゃないものね。変わる時には変わらなきゃ。シゲさんごめんささい、お店閉めます、酒屋さんすいません、ソーラーやります。さっぱりするわね。重荷が下ろせて。

そしたらあたし昔みたいにバリバリやるわよ。アイデア出してプレゼンやって。楽しいわねきつと。ちよつとは自分が世の中動かしてるような気持ちになれて。。。でもいいのかな、あたし後悔しないかな、だいじなものをつかき間違えて捨ててきちゃったみたいなの、取り返しのつかないことしちゃったみたいなの。。。

澄江

あんたなに臆病になってるのよ。

諒子

臆病じゃないわよ。だからさ、

澄江 何よ。

諒子 あたしが言いたいののはさ、

澄江 なんなの。

諒子 つまり、何が一番だいじかってことだね、

澄江 だから自分の可能性だって。

諒子 そりゃあんたはそう言うでしょうよ。ずーっと自分でそうやってきたん

だから。だけどそういうね、可能性とかね、アメリカ型の能力主義とか、

勝ち組とか負け組とかそういうんじゃないかね、もつとき、人と人との

おつきあいとかさ、木のぬくもりとかさ、

はーっ！木のぬくもり？

澄江 諒子 そうよ木よ！昔からある古いこの家の柱とか畳の、このふわぁー…って

いう、このさ、

澄江 ふわぁーってなによ、ロジカルじゃないわね。

諒子 あんただっていいって言ってたじゃん。このふわぁーでぼよーんて…

澄江 何言ってるかわかんないわよ！小学生じゃあるまいし。

諒子 あんたこそ何よ、世間の荒波にもまれすぎてがさつになっちゃって。

澄江 思い出しなさいよ、世界はもつと広いのよ。

諒子 世界ってなに？ここだって世界でしょ。

朝倉 まあ落ち着いて。

国男 地上げ屋は引つ込んでろ。よくわかんねえけど良さげな話してんじやねえ

か。

光代 あのだいたいいかほどぐらい、

国男 擦り寄んなって。

と、厨房から繁男が、五杯の善哉を載せた盆を持ち、

繁男 おまちどうさま！

皆 え・・

繁男 善哉です。食べてやってください。

諒子 シゲさん・・。

繁男 ・・(目と手で皆に座れと合図)

皆、繁男の気迫に押されちやぶ台を囲む。繁男、茶の間に上がって、
五杯の善哉を並べる。

繁男 俺から菓子とつたらなんにもねえんだ。この店なくなったら、なんにもね

え。働かせてください。体しっかり治しますんで、働かせてくれ。わがまま言うようだけど、こういうふうにしかならしていけねえ人間がいるって

ことをわかってください。

繁男、一礼し、厨房に戻り、調理台の前で、こちらに背を向け立つ。

諒子
・・・じゃ、いただきましょうか。

皆、目礼し、神妙な顔で善哉を食べ始める。

朝倉
あ、うまい・・・。

澄江
おいしい・・・。

国男
当たり前だよ。シゲさんの善哉はうまいに決まってるんだよ。

光代
決まってるよねえ。

諒子
シゲさん、みんながおいしいって。

皆、笑顔で食べる。繁男のすすり泣きにが聞こえ、やがて号泣になる。

音楽。

皆
・・・。

皆、その声を聞きながら、泣き笑いのような顔で善哉を食べる。
暗転。

【七場】

どこからか、餅つきの声と音が聞こえる。

厨房の一部に明かり。厨房の戸が開き、塚田が小豆の袋を担いで入ってきて、しかるべき場所に置く。

塚田が茶の間のほうへ移動するのに合わせて、茶の間の一部に明かり。

塚田、厨房から茶の間に身を乗り出すようにして、

塚田

シゲさん、シゲさん・・・。

塚田、シゲを探すのあきらめ、背を向けかけ、ふと仏壇が気になり、茶の間に上がり仏壇の前へ。座って鐘を鳴らし、

塚田

えー、諒子さんのお父さんとお母さん。はじめまして。ドルフィンの塚田といえます。一時は諒子さんによこしまな気持ちを抱いて申し訳なかった。でもいまは、そういう気持ちはまったくなくなりました。というのはね、あの人、かっこよすぎるんすよ。俺とはね、大きさが違いすぎましたね。このふた月、町は地上げ問題で大揺れに揺れました。賛成派と反対派

が入り乱れたんすよ。俺は反対派です。もうね、この町が好きで、わざわざ古い家借りてバーに改装したぐらいすからね、この町はこの町のまんま
でいてほしいんすよ。

塚田、喋りながらちやぶ台附近で茶を入れ始める。

塚田

でも言ってみりや、それはよそ者の意見すから。地元的にはビルができて、
人とお金が集まったほうがいいって人もいっぱいいましたから。それをま
とめたのが諒子さんすよ。諒子さんはどっちの意見も聞いた。そしていつ
も、病気のシゲさんが善哉作った話したんすよ。この町にはこんなふう
にしか暮らせない人間が大勢いる。シゲさんそう言ったのよ。そうねえって
うなずけばいいのか、何古いこと言ってるのよって笑い飛ばせばいいのか
あたしわからない、あなたどう思うって、一人一人に聞いたんです。いろ
んなこと言う人がいたみたいだけど、ちよつとづつ空気が変わってきました
た。まだしばらくはこのままでいいんじゃないか。みんなそんな感じにな
ってきたんすよ。

ちやぶ台には、皿ののったじょうよ饅頭が一つ。塚田、それを手に
取り、

塚田

地上げに頼らなくてもいいように俺たちでがんばってみようや、新しいも
んも取り入れてみるか。年寄り連中もそんなことを言い出したんすよ。結
局、地上げの話はなくなりました。反対しようつてことで、商店街が一致
団結したんですよ。これはもう、諒子さんのおかげです。俺もう、リスベ
クトつす。そういうわけでバーの仕事の合間見て、シゲさん手伝い初めた
んすよ。

厨房の戸が開き、ケーキ屋の箱を持った繁男が現れる。繁男、茶の
間で饅頭を手にし茶を飲みながら喋る塚田を不審な表情で見守る。

塚田

まあ、シゲさんも病気は治ったとは言え、年つすからねえ。もう半分くた
ばってるわけっすよ。もういつくたばっちゃっても不思議はないっすから
ねえ。そうなると諒子さんも困るから、俺が手伝って負担軽くして、少し
でもシゲさんが延命できるように、まあ、そんな感じで頑張ってるわけっ
すけど。。。

と言いながら塚田、茶を飲み飲み、饅頭を食べる。

繁男、背後から塚田をひっぱたく。明かりは全体へ。

正月も近い晴れた暮れの午後。

塚田 イテッ。

繁男 イテじゃねえよ馬鹿。なんで饅頭食っちゃうんだよ。

塚田 あったから。

繁男 だめだよ、これは正月に売るじょうよ饅頭なんだよ。さつき最初のぶんを

ふかしたから、女将さんに食べてもらおうと思って置いといたんだろ。

(食べかけを皿に戻す)

塚田 返すな馬鹿。

繁男 じゃあ食べるぞ。

塚田 ああ、喰っちゃまえ。

階段から年賀状を手に諒子が降りてきて、

諒子 何騒いでんのよ。

繁男 あ、こいつが女将さんの饅頭食っちゃったんですよ。

諒子 あら。(事務所へ向かう)

繁男 もういつぺんやるよ。

塚田 あ、手伝いますよ。

繁男 いいよ、なんにもできねえんだから。

塚田 仕事覚えたいんですよ。シゲさんが死んでもその技を後世に伝えようと、うるせえや。

塚田 あ、インターネットで弟子募集したらどうですか？俺、段取りつけますよ。いいよ。

塚田 いま何買ってきたんすか、なんか箱もって、いいんだよ、いちいち・・・。

繁男は厨房へ。塚田は、事務机で顧客名簿を見ながら年賀状の宛名をチェックする諒子に、

塚田 諒子さん、春のイベントも頑張りましたよね。俺、いい企画考えますから。

諒子 ハハ、気が早いわね、なに張り切ってるの。

塚田 この町、盛り上げていきたいんすよ、なんか、そういう雰囲気になつてきたじゃないすか。俺、諒子さんについていきますよ。これから町ひっぱってくの、間違いなく諒子さんだから。

諒子 荷が重いわねえ。でもそう言ってもらえると助かるわ。よろしくね。

塚田 はい。

繁男 (厨房から) おい、手伝うなら手伝ってくれよ。

塚田 はい。

塚田、厨房へ。

と、上手路地裏のほうから、一升瓶を持った国男と光代がやってくる。

光代
諒子さん。

諒子
ああ、こんにちは。

国男
暮れのご挨拶にね。

諒子
あら、それはご丁寧に。(厨房に) シゲさん、お菓子。

繁男
へえ。

国男と光代、酒を縁側に置き

国男
まあ今年はいろいろあつたけどさ、落ち着いてよかったよ。

光代
諒子さんのおかげだよ。

諒子
みんなが頑張ったからよ。あたしは音頭とっただけだから。

国男
その音頭とるつてのがだいじなんだよ。下町の人間は頑固だからなあ、いったんこじれると意固地になっちゃうんだよ。あいつは地上げ派みてえだから、こつちからは口きかねえや、なんてな。で、反対派の連中は頭かて

光代
国男

えからな。俺は昔っからここにいんだい。一步も離れえぞ、なんて理屈にもなつてねえこと言うから話になんねえ・・何笑つてんだよ。
あんたのことだろそれ。
あ、そうか。

三人、笑う。

事務室に店から菓子折りを持ってきた繁男が、

繁男

女将。

諒子

はい、ありがとう。(菓子折りを受け取る)

光代

シゲさん。元気になってよかったねえ。

繁男

へへ、女将にはすっかり迷惑かけちまって。

諒子

でもさ、シゲさんが病気になつてくれたおかげであたしも、この店とこの

町のことやっとな気で考えたのよ。

国男

そういうもんかもしんねえなあ、俺たちも地上げの話が出てやっというい

ろ考えたんだよ。

光代

ふだんは売れないから店たたんじまおうかなんて言ってる人たちもねえ。

国男

たたんじやいけねえんだよ、この町ごとが俺たちなんだから。豊まなくて

いいようにがんばんなきゃいけねえんだ。それがやっとなかったんだよ。

と、厨房から塚田が、ケーキの箱を手に、

塚田 シゲさんも頑張ってますよ。シュークリーム買ってきて、

繁男 おい、馬鹿野郎、よけいなこと、

塚田 これ、カフェオレ味ですかねえ。

諒子 あらシゲさん、カフェオレ大福作ってくれんの？研究用に買ってきたんでしょ。

繁男 いや、まだ作るかどうかはわかんねえよ。やってみてうまくいったらな、

諒子 それでけっこう。よろしくお願いします。

塚田 うまいっすよこれ。

繁男 馬鹿、食うな。しまえさつさと。

繁男、走って店から厨房へ。三人、笑う。

国男 ドルフィン手伝ってるのか。

諒子 うん、シゲさん心配してくれてね。おたくは？瞬君、バイトしてるみ

たいじゃない。

光代 うん、わりとよくやってくれてんだよ。なんだかね、酒屋の仕事もこの町

も、だんだん好きになってきた、なんて言ってくれちゃってさ。そういう奇特な若い人がいくらかはいるのよねえ。

そこが望みだと思うのよ。そういう人がちよつとづつ集まってさ、昔のいいところを残して新しい町をつくってくの。あたしはそのお手伝い。頑固なじいさん連中との仲を取り持つわ。

あいつに教わってさ、これ買ったんだよ。(iPhoneを出す)
あら。

(軽快に操作しながら) なかなか便利だよこれ。

ツイッターも始めたんだよ。

ほんと？

と、上手路地裏のほうからバイト姿(酒屋の前掛けなどをした)瞬
と直美登場。

直美・駿

こんにちはー。

直美

お父さんたちいますー？

国男

おう、いるよー。

瞬

お父さん、

国男

ほい。

諒子

国男

諒子

国男

光代

諒子

瞬 銭湯に行ったら番台のおじさんが今日寄ってくれて言っていましたよ。

直美 来年の手ぬぐい作ったからご愛顧のお礼に差し上げたいって。

国男 あ、そう、そりゃ嬉しいなあ。あ、瞬ちゃんさ、

瞬 はい。

国男 俺、FACEBOOKも始めたいんだけど、あとで教えてくれるかな。

瞬 はい、すぐできるようにしてあげますよ。

諒子 へえ、すっかり進歩したわね。

光代 通販も始めようって言ってんだよ。

国男 いやあ、しかしこれだけ便利になると、いつか店なんかいらなくなるかも

瞬 しんねえな。こん中に町が入ってるようなもんだろ。

瞬 だめですよ、人と人とが顔合わせないと。

国男 そうかい。

瞬 バイトやっているとわかります。お酒持ってって喜んでくれるところっちも嬉

しくなるじゃないですか。幸福は脳内だけじゃつまらないですよ。誰か

と分かち合わないよ。

国男 へえ、いいこと言うねえ。

光代 意味わかんのかい。

国男 わかんねえ。だけどいい感じだよ。じゃ、俺たちは銭湯に挨拶行くか。

光代 そうだね。

直美

じゃあ、あたし店戻るわ。瞬君は残りの配達よろしくね！

瞬

うん。

諒子

あ、これ持つてつて。(菓子折りを渡す)

光代

ああ、ありがとう。

国男

じゃあよいお年を。

諒子

よいお年を。

塚田

ちよつと瞬くん借りるよー。(瞬を連れていく)

国男、瞬、光代、路地裏のほうへ退場。最後に行こうとする直美に、

諒子

直美ちゃん、よかったわね、仲良くなれて。

直美

お父さんも進歩したけど、瞬君も進歩した。

諒子

うん。

直美

よいお年を。

諒子

よいお年を。

直美、路地裏のほうへ。と、すれ違うように澄江登場。

直美、澄江に一礼し退場。澄江は、ちよつとためらうように縁側の

ほうへ。諒子は気づかず事務室へ。

澄江
・・諒子。

諒子
あら澄江、久しぶり。

澄江
ちよっとね、暮れのご挨拶に。

諒子
そうですか、それはそれは。(厨房へ) シゲさん、澄江来たの。お饅頭で
きたら、

澄江
あ、いいわよすぐ帰るから。ここでいい。

諒子
そう？

澄江
(厨房に) シゲさん、元気になってよかったですね。

繁男
はい、おかげさまで。

繁男は挨拶だけで仕事に戻る。諒子と澄江はきままずい感じで縁側で。

諒子
どうしたのよ、もっと早く来てくれてもよかったのに。

澄江
だってきまり悪いじゃない。プロジェクトも中止になったし、あなたも朝
倉さんの会社への入社断ったし。

諒子
朝倉さんとはその後どう？

澄江
うん、なんとかね。最初はあなたが断ったことでちよっと気まずかったけ
ど。あの人、悪い人じゃないのよ。反省してたわ。あなたにどうしても入

ってほしかったから、エコモールの話あと出しにして、かえってこじらせちゃったかなって。

うん・・・。

あ、田村さん今日来た？

ううん、しばらく来てないけど。

そう、じゃあこれから来るのかな。さつき駅で見かけたのよ。

じゃあ、来たらいつしよにお茶飲みましようよ。

いいわよ、あたしは顔見せないほうが。

どうして？

彼、自分のことどう言ってる？会社での役職とか。

役員じゃないの？

(首を振る)

局長？

ずっと課長だったのよ。で、こないだ内示が出たんだけどもね、一月からは金沢支社の管理部長。

え、一月？もうすぐじゃない。

そう。たぶん、そこで定年を迎えるんじゃないかな。

どうして？一番のキレ者だったじゃない。

あなたが会社辞めてから失敗続きだったのよ。ちよっと天狗になってたの

澄江 諒子 澄江 諒子 澄江 諒子 澄江 諒子 澄江 諒子 澄江 諒子 澄江 諒子 澄江 諒子

かな。お得意の言うこと聞かないで、自分のプランを押し切るようなことが続いている。上にも下にも、味方がいなくなっちゃったの。会社ではいつも、むすつとした顔で一人で歩いてるわ。

諒子 そんなことないでしょう。あたしには昔どおりよ。面白くて、優しくて。あなたの前ではかっこつけたいのよ。・・どのていどなの？付き合います。

澄江 お茶飲むだけよ。

諒子 ほんと？

澄江 ほんとう。

澄江 じゃあ安心した。彼、仕事がそんなふうだから、やけっぱちになって家庭を壊すかもしれないでしょ。あなたがそんなことに巻き込まれたら大変だと思ってる。

と、店の戸があき、田村登場。旅行鞆を持っている。

田村 こんにちは。

繁男 あ、いらつしやい。女将さん、田村さんですよ。

諒子 あらお久しぶり、いらつしやい。

田村 シゲさんよかったね、元気そうで。

繁男 はい、おかげさまで。

澄江は、台所のほうへ。田村、店から事務室へ。

田村

やあ、すっかりご無沙汰しちゃって。いろいろ忙しくて。

諒子

そうでしょうね。

田村

実はちよつと、しばらく顔見せられないからご挨拶にね。

諒子

あら、ご出張？

田村

いや、転勤だよ、北陸方面。

諒子

あらそう？じゃあきつとご栄転ね。

田村

うん、まあ、次へのステップってとこかな。東京に戻ってきたらますます

忙しくなるよ。

諒子

それはおめでとうございます。ご家族もいつしょ？

田村

いや、単身だよ。娘の学校があるから。

諒子

そう。じゃあ体に気をつけなきゃだめよ。ごはんちゃんと食べてね。

田村

うん・・・あの、

諒子

はい。

田村

いろいろどうもありがとう。君にまた会えたから今年はいい年だったよ。

諒子

あたしも。いろいろあったけど、元気にももらった。・・・ハハ、どうしたのよ、なんか堅いわよ。

田村 そうだね、ハハ、ちゃんと挨拶しようと思つて。

諒子 あ、買ってもらったマフラー、最近してるわよ。

田村 そう。

諒子 いいわよ、あつたかくて。

田村 そう、よかつたよ。デパートは楽しかつたね。

諒子 うん、夫婦に間違えられたり。

田村 花火も楽しかつた。いい思い出ができたよ。

諒子 。。。

田村 実をいうと僕、会社でも家庭でもあまり楽しいことがなくてね。だめなんだよ、失敗ばかりで。君が思つてるような男じゃないっていうか、

諒子 何言つてるの、あなた素敵よ。面白くて優しいわよ。自信もつてよ。

田村 。。そうだね。頑張るよ。じゃあ。

諒子 気をつけてね。こつち来た時は寄つてよね。

田村 うん、よいお年を。

諒子 よいお年を。

田村 シゲさん、じゃあ。

繁男 あ、よいお年を。

田村、店の戸から退場。

澄江

優しいわね。このウソつきって言ってやりゃよかった。

諒子

言っただうなるのよ、せっかく楽しかったのに。あたしと田村さんはあた

しと田村さんよ。出世のことは関係ない。

澄江

泣きなさい。

諒子、泣きながら澄江に抱きつく。

諒子

ティッシュ取って。

澄江

・・諒子は情に弱い。おかげで損してる。

諒子

そう？

澄江

朝倉さんの話を断ったのもシゲさんのこと気にしたからでしょう？

諒子

ちがう。そういうことじゃないわよ。

澄江

じゃあ入社の話は別に考えてもよかったんじゃない？プロジェクトが中

止になってからも朝倉さん、あなたにご執心だった。何度も電話がかかっ
てきたでしょ。

諒子

シゲさんのことだけじゃないの。あたしがこの店をつづけたいと思ったの。

澄江

どうして？あなたのこの十一年、籠の鳥みたいな気持ちだったんじゃない

いの？責任感でお店継いじゃったけど、ほんとはもっと広い世界で自分を

諒子

試したいって。そう思ってたんじゃない？もったいないわよ。あなたチャ
ンスを逃したわ。
・・。

と、盆に二杯の善哉をのせて繁男が持ってくる。

繁男

どうぞ。

諒子

あら。

澄江

善哉？

繁男

へへ、相も変わりませんで。

澄江

すいません、いただきます。

諒子

ありがとう。

繁男、厨房へ戻る。

諒子

食べて。

澄江

うん。

二人、善哉を食べながら。

諒子 こういうふうにはか生きられないって、

澄江 え？

諒子 素敵なことだと思ったの。

澄江 シゲさんのこと？

諒子 シゲさんも、この町の人たちも。

澄江 頭が堅いのよ。

諒子 堅いって、悪いことばかりじゃないわよ。あんたも堅い。

澄江 どこが？

諒子 会社で偉くなろうとしてる。その一念でずーっとやってきた。こんなふうにはか生きられない。あんたもそう思ってるんじゃない？

澄江 確かに。どこでそう思ったかな。

諒子 どっかでそう思ったのよ。そっかあんたは強くなったの。役員待遇にまでなた。

澄江 あんたはフラフラしてた？

諒子 そうね、あんたの言うように、気持ちのどっかでほかに居場所があるような気がしてたわ。それをやめるの。

澄江 ここしかないって。

諒子 そう。この店とこの町。

澄江 あえて言つてあげる。馬鹿よ。

諒子 そうかな。

澄江 そうよ。馬鹿よ。馬鹿。もつたないわ。あなたはもつといるんなことができる。

諒子 まだ迷わせたいの？

澄江 落ち着いたらつままないわよ。あんたは迷いまくつてあたふたしてんのが面白いんだから。

諒子 ハハ、意地悪ね。

澄江 帰るわ。

諒子 うん。

澄江 シゲさん、ごちそうさま。おいしかったー。

繁男 (厨房で) どういたしましてー。

澄江 じゃあね、初詣いっしょに行こうよ。

諒子 うん。

澄江 よいお年を。

諒子 よいお年を。

音楽。澄江、上手裏路地のほうへ退場。

諒子、盆に片付けようとして、二膳の善哉の椀を手に取り、見る。

諒子
。。。

繁男
女将さん、饅頭できましたー！

諒子
はーい。

塚田
ふかしたてがうまいすよ。

繁男
偉そうに言うな馬鹿。

諒子、笑いながら、厨房へ向かう。茶の間で止まり、

諒子
あら、いい匂い。。。

音楽UP。早く早くと、二人に促され、諒子、厨房へ。
明かりは落ち、縁側の二膳の善哉にスポット。暗転。

(了)